

---

# 時報

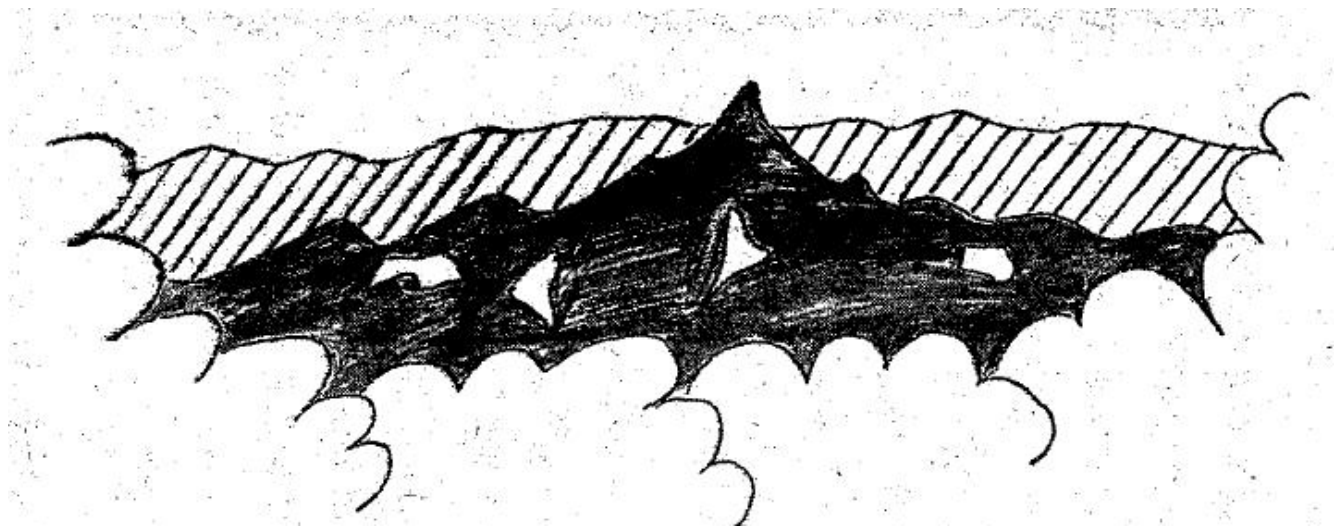
No.8

---

1957.10

大阪大学山岳会

---



○これからのザイル

篠田軍治

○縁の下の力持

田島汎

○合宿報告

1955年度

1956年度

○マナスル通信

——サマ・ベースキャンプにて——

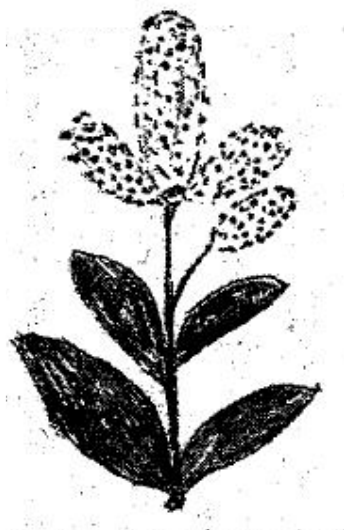
徳永篤司

○山行記録

1955年8月～1957年3月

○編集後記

○会員名簿(省略)



## (目次)

時報 第8号

# これからのザイル

篠田軍治

登山者はザイルを技術的に見るとタブーともいうべき無理な使い方を無関心に行っている場合が多い。墜落をザイルでとめようとするのは少々虫の好過ぎる注文であるが、それにしても今までのマニラは衝撃には弱過ぎる。これは昔からわかっていたことではあるが、綱を太くすれば登山用としての価値が無くなるので、今の太さに落ちついたものと思われるが、この欠点はナイロンの出現によって大いに改善された。しかし、ナイロンとても欠点がないわけでもない。これについては去年の阪大工学部報告に述べてあるのでこゝにはふれない。ナイロンよりもテリレンの方が優秀な性質をもっている。そこで、昨年、南極観測用にテリレンのザイルを試作して、一部は阪大の今年の春山にも使ったが、衝撃に対する性能は決してナイロンに優るとは云えない。しかし、濡れても強度が落ちないとか、ナイロンよりさばき易いことなどは確かに優れている。しかし、合成繊維にはどうしても避けられない欠点がある。そこで、これからは金属のワイヤーロープが登山用に注目されるのではなかろうか。もちろん今までのザイルを全面的に置き換えることはあり得ないが、特殊な目的、例えば、渡渉とかトラバースなどには確かに応用面があるのではなかろうか。この次のステンレス鋼線は平方耗当たり二〇〇キロ以上の強度のものが珍らしくないので軽量で可撓性をもったワイヤーロープも可能である。

合成繊維の方もテリレンよりも優れたものが既に出来ているようである。このようにしてザイルも益々優れたものが現れるであろうが、ザイルは飽くまでも登攀の補助具である。それ以上を期待するのは無理であることを忘れてはならない。

# 縁の下の力持

——特にリーダーの諸君に——

田 島 汎

“投手の成績の半分は捕手の成績である”野球評論家はよくこんな事を言う。成程、捕手の好リードあってこそ投手はいいピッチングが出来るわけだが、しかし、記録欄に現れる成績は飽く迄投手のものであり、捕手のものではない。つまり捕手は投手の縁の下の力持というわけである。縁の下には土台石があってガッチリと柱を支えているが投手は野球チームの柱であるならば捕手はさしづめ土台石というところであろう。

所で“山登り”というスポーツは全ての下界のスポーツと事変り、朝起きてから夜寝る迄、一日の生活の全てがそのプレイの対象であるから、この運営は極めて複雑であり、従って記録面には何も現れない仕事をコツコツとやっていく人——即ち縁の下の力持は特に重要である。山へ行く迄に下界でやらなければならない厄介な仕事の数々、或は登攀をスムーズに行う為に麓の方で次々と片付けていかねばならない細々とした段取り等、“縁の下の力持”達のやるべき事は非常に多いし、又それをコナしていく人達があってこそ山登りが出来るというものである。

今年、マナルスの登攀隊に参加し種々と貴重な体験を積んで帰られた徳永先輩の土産話に“ナイケ・コルに山の様に積み上げられた諸物資を整理配分し、各キャンプへの荷上を段取りを、それこそ不眠不休でやり続けた M 隊員なくして今回の成功はあり得なかった”と、洩らしておられたが、それでいて輝かしい登頂や怖ろしい雪崩の記事にかくれてこの M 隊員の仕事などは一言半句も新聞には載らなかった。こういう M 隊員などは全く縁の下の力持中の力持で、頭の下る思いである。

所で話は変わるが、阪大山岳会にはいつの頃からかリーダー会というものがある。上級部員の中経験技倆とも優れた者によって構成されていることはその性格がチーフリーダーのスタッフであるという点と同様、恐らく他にもその例はみられるだろうが、阪大のリーダー会は他の同様の組織と矢張り何か異った一脈の血を持っていることは確かだ。

阪大山岳会が段々と成長しつゝあった頃、丁度、戦前から或程度山をやっていた人達が去って、全て戦後派ばかりで新しい阪大山岳会を築き上げようとしていた頃からリーダー会の特色はその構成員の立場が対等で且つフリーであることだろう。“リーダー会のメンバーは阪大山岳会の顧問だ”と云って笑ったことがあるが確かにこの一

面を表していよう。チーフリーダーの考え、或は部の趨勢に関係なく単なる思い付から一寸した研究事項まで自由な立場で、又、この席上に関する限り責任もなく持出し、話し合い、討論した。それだけにリーダー会の面々は山については種々研究し部のことについてはあれこれと観察しており、そして愈々事が決まって実行する段になるとそれらリーダー会の結論はチーフリーダーの意思として代表され次々の計画に反映されそれにかくれて見えなくなってしまうが、皆気持ちよく一生懸命やって来た。こういうリーダー達は即ち“縁の下の力持”であり、こうやって阪大山岳会は成長して来たのである。

その後、阪大山岳会も随分世帯が大きくなった。部員数から云っても優に二倍以上になったし、懸案の計画も次々と片附いていった。しかしそれ丈に部内の問題も多くなって来ようし、計画の立案、遂行にも種々の制約が出て来る。更に厄介なことには我々如きウルサイ OB が多数出来た。OB は新人と異り年もいっており経験も豊富なだけにもっと手に負えない代物になり兼ねない。こういう時、リーダー達——縁の下の力持達は今迄以上に頑張らねばなるまい。山について考え、部員について観察し、OB についてはうまく利用し、山行にも現れない骨の折れる仕事をコツコツと片付けて阪大山岳会をうまく運営していかねばならない。家が大きくなる程、シッカリした土台が必要であり、土台が頑丈であれば、それだけ又大きな家がその上に出来ていく。願わくばリーダー諸君又これからリーダーとなるべき諸君、より頑丈な、より有能な縁の下の力持になって戴きたい。

# 夏山合宿報告

<1955年>

木村裕一

南アルプスに夏山合宿をもって行ったことに就いて、関西学生山岳連盟の報告会の時、いろいろ質問を受けて戸惑ったのであるが、別にそれ程大きな狙いがあった訳ではない。部員の最大公約数が他人に煩わされない、落ち着いた合宿を希望したまでのことである。只ここで留意すべきことはかゝる潔癖性、孤独性が我々の弱点ともなるということである。

以下は山行記録

日時 一九五五年七月十八日～七月二十八日

参加部員

(CL) 木村裕一、(SL) 宍戸元、(装) 山本進一郎、(食) 西川元夫、(記) 辻川真、村瀬泰弘、岡田博司、四方大中、寺田満洲朗、高木俊夫、山田良平、樋下重彦、飯田稔、大井孝和、河合、松本保枝、(OB) 大村一生

七月一八日 大阪発 一七時一〇分 (身延線廻り)

七月一九日 (小雨)

甲府着 七時四六分

買物の后、貸切バスにて夜叉神トンネル入口に向う。途中芦安部落にて食糧調達のため先発の大村、宍戸が合流す。

トンネル入口発 一時五五分

夜叉神峠小屋着 一時三〇分

鮎差し 三時三〇分

荒川口 六時三〇分

夜叉神のトンネルは八分通り完成、トラックは入口まで往復していた。

夜叉神峠で初めて現われる北岳方面の眺望は典型的な南アルプスの姿であり、折から立ち昇るガスを加えて我々の眼を奪うに充分であった。一旦鮎差しに下り、岩へつりの後、吊橋を一つ渡って荒川小屋に着く。小屋前の河原にて幕営。

七月二〇日 晴後雨後曇

荒川口出発八時、後発九時

野呂川は径らしきものはなく、河原沿いに行く。時々出喰わす岩場では重い荷物に苦しむ。なかなか道ははかどらず、後発隊宍戸、西川、辻川、大村は何時迄も追いつかない。先発隊でも寺田、高木の調子が悪く遅れる。四時頃後発隊の連絡あり、故障者が出来た為、深沢から少し上った所の岩小屋にて一泊を決定。止むを得ず、寺田、高木は立石の岩小屋に泊るよう連絡す。本隊は赤ぬけ沢手前にてキャンプ。六時三〇分。

陸地測量部の地図五万分の一の大崖頭山の北から巻いて野呂川に下る点線道は少し大きな荷物を持つと通過不能なるも近き将来には立派な道が出来る由。

七月二一日 晴後夕立

キャンプ地出発九時

広河原小屋 一一時発 二時三〇分

白根大池 三時

朝、後発隊を援助すべく村瀬を下らす。

キャンプ地より危ヶかしい渡渉を二度、視界が開けたと思うとそこが広河原であった。

荒川口から広河原まで都合四度の渡渉を必要とした。

白根大池到着後、木村、山本、岡田が広河原まで後のものを迎えに行く。後発隊の広河原着が非常に遅れた為、山本のみ大池まで登り、他は小屋に泊る。

七月二二日 晴後曇

広河原 発六時

大池 着九時 発九時四〇分

大樺沢二股 一一時

午後から新人グリセード

大池から大体等高線沿いに進む。踏跡は身軽な装備でバットレスに行く人達のものらしく、定かでない上に急傾斜のトラバースなので非常に苦しかった。

大樺沢両股附近にはキャンプサイドらしき場所は全くない。右股上流約三百米に四五人用の長衛の岩小屋があるだけ。止むを得ず傾斜約七度の草地を手入れして設営。

大樺沢左股の残雪は傾斜が緩く、最上部短距離がグリセードの対象となるのみ。

従ってグリセードの本格練習は望めず、形だけの練習を行う。

七月二三日 雨 停滞

七月二四日 雨 停滞

雨天でも炊事当番は五時に起床し、朝食の用意をする。朝食が終っても雨が止まず、二日を無為に過ごす。

ポリエチレンをフライに使ったが非常に調子が良かった。

七月二五日 晴後曇

北岳上部はガスに包まれ、何時降り出すか判らないような天候、加えて中央バンドへのルートが不明の爲、木村、宍戸、山本、西川、村瀬、四方の六名が北岳バットレスの中央バンドより各尾根の取付き附近を偵察す。

大村 OB、他新人六名は八本歯沢より北岳—二段窪を踏査。

辻川、岡田は、東北稜—北岳—左股を踏破。

七月二六日 晴

第一尾根 宍戸、村瀬

第三尾根 木村、寺田

第四尾根 山本、西川

第五尾根 ① 辻川、高木、山田

② 四方、樋下

東北稜 大村 (OB)、大井、飯田、松木

七月二七日 晴後曇

第一尾根 四方、山田

第二尾根 宍戸、西川

第三尾根 辻川、飯田

第四尾根 大村、岡田

第五尾根 寺田、河合、樋下

村瀬、大井、松木

中央稜 木村、山本

七月二八日 晴

両股 発 七時三〇分

白根大池 八時三〇分

広河原小屋 九時三十分 発九時五〇分

広河原峠 一時一〇分着 発一時四〇分



赤薙沢出合 着三時 発三時四五分  
横手 七時二五分— (バス) — 葦崎駅

以上

## 北岳合宿雑感

重い荷物を担ぎ一、七七〇米の峠を越え、径なき沢を何度か渡渉し、再び胸突く坂をあえぎ登り、大樺沢両股に着いた時、正直なところ、ほっとした。七月二五日、偵察に終止したのも掛る気持ちが全部員にあった爲に起因する。

新人にとって南アルプスのスケールの大きさは想像外のものであったろう。非常に苦しく、而も酬いられる所に少ない合宿であったと思うかも知れないが、かくして得た山の初印象が、やがては正しき自信を生み、立派な岳人に育て上げてくれる源泉となっていることに気付くであろうと信じる。

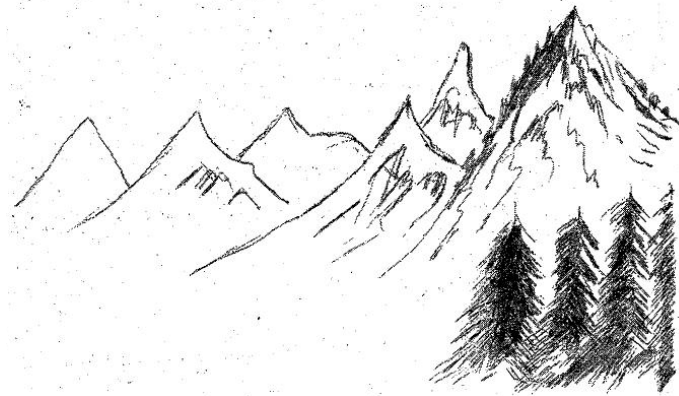
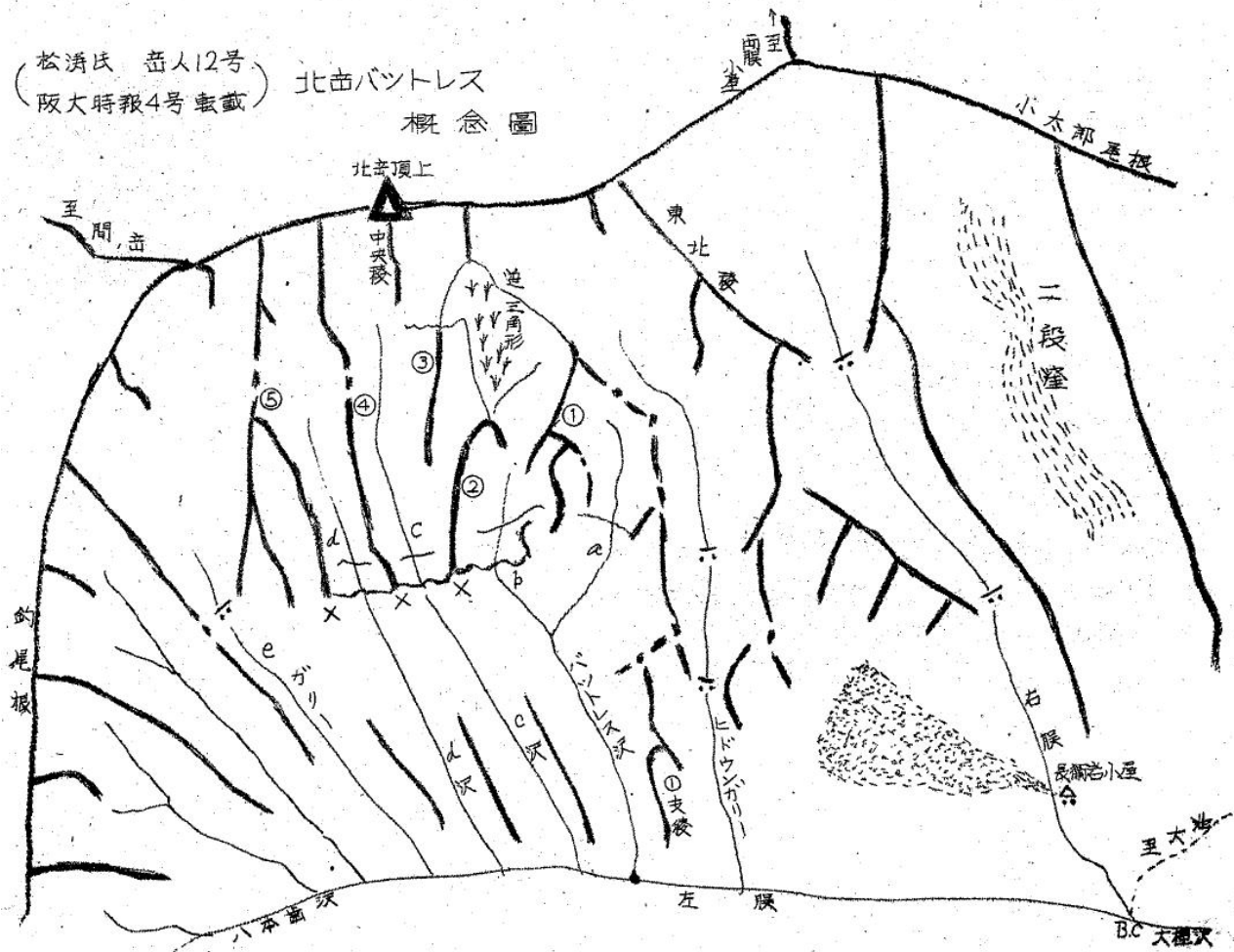
南アルプスの夏の天候は北アルプスよりも悪く、北岳が完全に姿を見せたのは一日しかなく、毎日午後になるとガスが下りて来た。我々は両股に入る日から五時起床、六時出発を厳守し、三時頃にはBCに帰っている様にした。

総括的に合宿を反省すると、例年のやゝもすると観念的になり勝な形式的な合宿形態を打破し山全体を把握するのに役立ったと思っている。かかる合宿を四年に一度位行うのも良いと思う。

——終——

(松涛氏 岳人12号)  
(阪大時報4号 掲載)

### 北岳バントレス 概念圖



#### ○ 第一尾根

#### 四方記

七月二十七日 晴

パーティ 四方、山田

午前九時、取付きのバンドに着く。少し休んで早速登り始めた。最初の一ピッチで第一尾根を横切っているハイマツのあるテラスに出る。それを左にトラバース、尾根の左側に出る。昨日の宍戸、村瀬の両氏がリッチ通しで途中のオーバーハングを乗切るルートを探っているのので、今日は左側面のガリー沿いに登る。此處は岩が非常に脆

い。あまり快適とはいえない。三ピッチ程上げた所より、リッチを目指して脆いルンゼを詰める。今日の岩場はガスが巻いて居り、時々その切れ間より第二尾根がすごい容姿をのぞかせている。注意はしていたが案のじょう、小さいかったホールドが一つくずれた。それにつられたように次々に落石、すざまじい反響を残して石が落ちて行く。ジッヘルをしていた山田君にも二、三当ったようだが幸い怪我はなかった。小生は右手首をちょっと切った程度で済んだ。まずまず運がよかったと云えよう。すぐに手近な割目を探してハーケンを打ち込む。この悪場では意外にも又、幸運にもぐっと吸込まれるようにハーケンが効いてくれた。やがて小さな少し傾斜のついたテラスに登り着く。そこから右にトラバースして主稜にでる。二ピッチでザイルを解く。後はお花畑のある快適な尾根だ。途中食事を摂り稜線に着いたのは十二時三十分であった。  
(中央バンド 〇九・〇〇、頂上一二・三〇)

## 〇 第二尾根

西川記

七月二十七日 パーティ 宍戸、西川

昨日、一昨日と中央バンド迄は通いなれた道である。b ガリーを少しつめて左側第二尾根のカンテ状側稜にとりつき途中でアンザイレンして主稜に上る。主稜をおおうブッシュもこの辺が上端である。主稜はまもなく傾斜がまし、フェイス状となるが、c ガリ側をからんで登る。次のピッチで釣尾根からも顕らかに認められる赤茶けた大チムニー下のテラスに立つ。第二尾根はこゝから約八十米垂直に高度を増している。ピトン一本効かせて第一尾根の落石の音を耳に b ガリ側へ一ピッチトラバース。つるつるの逆層のスラブでフリクションだけを頼りにカンテの手前にあるミヤマハンノキの生えたテラスに着く。途中ピトンを二本打ったがこゝで更に一本うたわせてカンテを乗り越えそこから上にはしっている草つきリンネに登りハンノキの生えたバンドを右へトラバースしチムニーにはいり込む。五米ですぐチョックスストーンにぶつかるが、これは乗り越える。岩と岩に挟まれた青い空は明るく少しのぞいたハイマツにはげまされる様に更に十米上り左へ五米ばかりトラバースしてハンノキのテラスに立ち左のカンテを乗越えると逆三角形の下の頂点当り四十米のザイルが伸び切ったところでザイルを解く。主稜に出てから三十米六ピッチの登攀だった。ハイマツに囲まれたお花畑で昼食、頂上で既に到着していたパーティに迎えられた。

(BC 〇六・〇〇、中央バンド 〇九・〇〇、頂上 一四・〇〇)

## ○ 第三尾根

木村記

七月二十六日 パーティ 木村、寺田

BCから左股を登り、バットレス沢の出合まで約一時間を要す。そこからルンゼに沿って登る。中央バンドの下の壁は沢を右に採ってゴルジを登る。危険とまでいかないが非常に不安定で落石頻り。不安定な草付きを登ると左手に第一尾根から草のついたルンゼが入っている。灌木に掴まりながらオーバーハングを越すと急な草付の斜面に出る。登りつめた處が第一尾根主稜である。そこを越えた所から中央バンドが幅広く横に走っているが相当急斜面である。しかしやはりバンドらしくお花畠が広がっている。

そのバンドに沿って大きく迂回するとC沢に入る。少し登って急な雪溪をトラバースすると、第四尾根の取付きがある。第三尾根へはもう少しCルンゼを登る。何處から登っても良い様な取付きである。コンティニアスで暫く登ると這松のブッシュ漕ぎが始まる。終った所で第一回の昼食をとる。第二尾根の連中は、マッチ棒の頭位の大きさに見える。第四尾根のパーティは快調なピッチで登っているのが割に近く眺められた。昼食後、Cルンゼ側のV字型の岩の割れ目を二ピッチ程登ると赤茶けた脆い岩質のオーバーハングに出喰わす。それを右に迂回し、第二尾根の方に廻ると、そこが逆三角形の一辺である。そこから頂上までコンティニアスで登る。頂上で全パーティの終結をまって八本齒沢よりBCに帰還す。四時三十分。

(BC 〇六・〇〇、頂上 一三・二〇)

## ○ 中央稜

木村記

七月二十七日 パーティ 木村、山本

第三尾根と第四尾根の間のCルンゼをそのまま登りつめると、象の肌を思わせるような茶褐色のオーバーハングが巨大に張出している中央稜直下に至る。時々落下が大きな反響と共に中空から降ってくる。周囲は薄暗くじめじめした感じで余り気分の良い所ではない。

オーバーハング直下を横に走る大きなリスを利用せんとするも不可能と思われたので少し左手の第四尾根側の侵蝕された赤茶けたクラックを試登しピトンを打つも利かず、元のルートに戻る。リスの間に二本のピトンを打ちトラバースする。足場がないので全く腕力に頼って三米位、微妙なバランスでテラスに立つとオーバーハングが体を外へ押出す。片腕がバランス保持のために必要なのでピトンがなかなか打てない。

隣の第四尾根のパーティはとっくに頭上を通過し、遠くヤホーが響く。ガラがだんだん濃くなる。時間が遠慮なく経過する。気休め同様のピトンを打ちやっとならぬルンゼに入る。下から四〇米のザイル一杯。後の山本は時間をかけないため、殆んどザイルをたよりに登る。次にV字状のルンゼを二ピッチ登る。

ここから上部は岩質が硬く、手に快感さえ与える。早くリッジにでるとオーバーハングが二、三あるようである。三ピッチ程、稜側を登ってからリッジに出る。稜は高度感があるだけで技術的に困難な處もなく頂上に至る。

(BC 〇六・〇〇、取付き 一〇・〇〇、頂上 一五・〇〇)

## ○ 第四尾根

七月二十七日 パーティ 岡田、大村 OB

第四尾根を末端から取付くならば手に負えないオーバーハングが連続していて相当時間が掛かるものと思われる。d ガリー側からの取付は横に走る二、三のバンドを利用すると聞くが、私達は中央バンドを経て、C ガリー側から取付いた。C ガリーを埋める豊富な残雪を踏んで少々登ると第四尾根はどこからでも容易に取付けるように見える。トラバース気味に草付を登り尾根に出た所は、マッチ箱から約八十米下部のテラスで、ここでアンザイレンする。灌木はこの辺りで終りここより上部は小さなハイ松と高山植物におおわれて明朗な尾根となる。マッチの箱の壁は右壁をからみ問題はなく、第一コルの上も容易である。第二コルの上も直登出来るがフリクションをきかせて右掬みに登るとすぐマッチ箱の最高点である。第二尾根から第五尾根まで一望のもとに眼下に見渡し仲間にもコールを送る。C ガリーで別れて中央稜に向ったパーティは未だ取付き点で困った様子をしている。第三のコルへの下降はアップザイレンし、そこから中央稜パーティヘルートを示唆するが、洞窟の様に陰気な此のバットレスの核心では反響するこだまも不気味である。第三のコルの上は滑らかなスラブのカンテであるが、左側の側壁に縦に走る小さなクラックを一息に登り、行きつまった處で左側の狭い草付のガリーに入る。このガリーは次第に傾斜を落とし、上部のハイ松まじりのお花畑で消えている。アンザイレンしてから十一ピッチでザイルを解き、後は鼻歌まじりで高山植物を踏みながら、緩斜面を主稜線に飛び出した。

取付き (九・四〇) - 頂上 (一二・一五)

# 一九五五年 夏山

(黒部源流から蒲田川へ) 八月一日～八月五日

八月一日(晴) 出発(九・一〇) - 祖父岳の肩にルックデポ - 雲の平散歩 - 祖父岳(一二・二〇) - 割物乗越(一三・二〇～一三・四〇) - 高天原(一五・〇〇～一五・三〇) - 大東鉱山事務所(一六・〇〇) - 奥のタル沢出合(一七・五〇) 奥のタル沢は右岸をはなれて林の中に明瞭な道がある。高天原は高山植物が咲き乱れ、無数の小池は水晶、赤牛を絵の様に映している。道は一旦赤牛方面から来る小さな支流に出て、約二百米にして奥タル沢に合す。

八月二日(晴) 出発(一〇・一〇) - 立石(一二・三〇) - 薬師沢出合(一八・一五) 昼食に岩魚を手掴みでとったりしながら、のんびりと河原の石を踏んで行く。

八月三日(晴一時雷雨) 出発(一〇・〇〇) - 赤木沢(一一・三〇) - 五郎沢(一三・三〇～一五・三〇) - 祖父平(一六・三〇) - 三俣蓮華テント地(一九・四五)

八月四日(晴一時曇り) 出発(一〇・四〇) - 双六小屋(一二・三〇～一三・三〇) - 大野間乗越(一四・四〇) - 蒲田川左俣(一七・〇〇) - 河原で露営(一九・三〇)

双六谷に下る最初の計画を変更して、冬山の偵察旁々大野間沢を下る事にする。ブッシュで道を見い出せず下降に可成り手間取る。大野間沢は下から見ると岳沢の規模を小さくした様な感じで、冬期の雪崩は笠岳側の急峻な幾つかのルンゼ状の沢が問題となるであろう。

八月五日(晴) 出発(九・二〇) - 新穂高温泉(一〇・五〇) - 栃尾(一二・二五) - 高山 - 帰阪。

岡田、東 OB

# 冬山合宿報告

—1955年度—

木村記

三年越しの懸案である春の黒部横断、剣登頂という大きな目標をもちながら、更に一つ厳冬期に大きな組織的経過雨を持った理由が二つある。一つは最上級部員が多数春山に参加出ないかも知れないということ、今一つの理由として冬春の二季共に大きな計画を樹て、無理なく動けるだけの部員を擁するまでに我が山岳部が成長したという確信を持ったことが挙げられる。

夏山が終り、冬山計画を本格的に練る頃、夏の北岳バットレスを消化したのだから引続き冬の北岳に入ってはという案も出たが、中堅部員の実力養成に主眼を置こう。我々は双六合宿を固執した。

夏山合宿の後半として、木村、松木が蒲田川右股を歩き、東OB、岡田が大沼乗越から蒲田川左股を歩いた。秋になって尾藤、田島両OBが下から大沼乗越を通過して双六小屋に入り、冬用の薪を作って置いて下さった。続いて辻川、樋下二君が食糧の荷揚げをし、新雪の頃、宍戸等女子部員を含めて最終的な偵察と荷揚げを行った。一方ルームでは、計画として最終目標を雲の平より黒部を渡り、薬師沢より薬師岳往復に置き、余力で赤牛岳往復、笠ヶ岳、槍ヶ岳往復の放射状登山並びに烏帽子への縦走を立案していた。その間、関本、山本が東京より三枝OGの参加を得、春山の準備として昨年度失敗した吊越しの準備に御前谷より阿曾原に抜けていた。かくして我々は十二月を待ったのである。

## メンバー

先発隊 木村 (CL)、宍戸 (SL)、石沢、村瀬 (記)、四方、山田、片山、石野カメラマン (毎日新聞)

後発隊 関本、山本 (装)、杵中、西川、辻川、岡田、尾藤 (OB) 以上十四名

## 行動概要

12月24日 先発隊 中尾部落 中島氏宅泊

12月25日 晴後曇

二股から少し上までトラックに乗るも積雪のためそこから歩く。木村、石沢、村瀬、石野カメラマン四名は雪の少ない中に一気に双六に入るべく、個人装備と食料少々及

びスキーをもって出発するも二千米附近から積雪が多くなり、小屋へは行けそうもないので引返す。後の四名は中崎橋の上の飯場に荷物を揚げ終り一部を大沼沢の左俣出合まで揚げていた。

(註) 左股には立派なトラック道が左岸を走りその道は大沼沢出合と二俣中央部辺り(右岸に岩小屋のある手前)で橋(中崎橋)を渡り、そこからまだ五〇〇米以上も伸びている。

大沼乗越とは陸地測量部の地図(五万分の一)で、樺沢岳と笠岳を結ぶ尾根中の標高二五八八・四の三角点のあるピークの西南にある二四五〇位の鞍部を云い、そこから蒲田川左股に入る沢を大沼沢という。夏道が今年開通した。

12月26日 曇時々小雪

宍戸、石沢、四方及び石野カメラマンが再び双六小屋に入るべく七時半には飯場を出て行った。残りの者は大沼沢出合(これからは出合と略す)まで荷揚げをする。連日の好天と雪の少ないうちに双六小屋に入るべく木村、片山が後発隊を中尾まで迎えに行く。しかし十日位に続いた好天はそれ以上我々を待って呉れなかった。十時頃飯場に帰ると丁度宍戸と石野さんが下山して来た所だった。

宍戸の報告によると上の情況は次の様なものである。

出合を十時、乗越に三時半、そこから山腹を巻いて双六に出る秋に通った新しい道を進むも、深雪が胸近くあり、三十分で百米しか進めなかったという。四時過ぎ断念して下山した。時間を稼ぐため極力装備を軽くする必要があったとはいえビヴァークの装備をも割愛したのは、稜線の積雪を過小評価したことと共に我々の犯した第一の失策であった。

石沢、四方は我々のボッカして置いた出合のテントに泊る。

かくして我々のデスクプランは最初から完全に狂ったが、飯場の雰囲気は後発隊の連中を加えてなかなか意気盛なものがあった。

12月27日 曇後晴

下に長く居れば居る程、我々は不利な立場に置かれることは明らかである。木村、関本、山本、空中それに尾藤 OB の四人が十人のサポートを受け万難を排し小屋へ登ることにする。サポート隊は小屋に揚げるべき荷物の殆どを持ち、後の四人は個人装備にビヴァーク用装備とスキーを持つ。途中で石野さんの注文のポーズを創ったりして時間を喰ったが昨日のラッセルが相当役に立った。

飯場発七時、大沼乗越四時半。



横巻き道が使えないので稜線沿いに行く。二五八八・四米のピーク迄は腰辺りまでもぐり、その頂上に至る頃にはとっぷり日が暮れていた。稜線は風が非常に烈しかったが、幸い天候が良くなり月光が明るく、槍穂高連峰を浮彫りにしヤッケに着いている雪の結晶にダイヤモンドの様な輝きを与えていた。

双六小屋着 八時半

石野氏は本日帰られる。カメラマンとして非常に苦勞をされた割に収穫が少なかったことは我々としても心残りであった。

12月28日 風雪

下では八時に出発。吹雪のため出合で引返す。上では、正午、昨日の約束に従って猛吹雪を衝いて飛び出したが、全然進めず小屋に引返す。

12月29日 風雪

小屋には主食豊富なるも副食乏し、下では、食物が乏しく雑炊、但し石野氏の置土産の野兎を喰った由。

12月30日 双六小屋 風雪、中崎橋の小屋 雪

12月31日 双六小屋 風雪、中崎橋の小屋 雪

1956年1月1日 双六小屋 風雪、中崎橋の小屋 雪

1月2日

停滞中毎日の如く下では中尾に食糧を調達に行く。と云うのはこんなに長く下に居る積りがなかったので食糧は全部大沼乗越に揚げてあった。

上では木村、岡本が正午頃からガスと風が少し弱くなった間を衝いてコルの食糧をタックする。岡本、顔面に軽い凍傷を受く。

1月3日 快晴、稜線も無風

下では炊事当番が二時半に起床、出合でやっと夜が明ける。五日間の降雪の爲、抜戸から下りている沢には幾本の雪崩跡があった。この沢は降ったら深く積ることなく雪崩ナダレている様子である。従って降雪中の通過は絶対避けるべきである。

乗越に着いたのが十六時頃であったが、そこから荷物が増えた爲、小屋に入ったのは最終二十二時であった。

小屋では朝この快晴が夜半まで続くと云う見通しを立て、後発隊へのサポートは木村、空中に任せ、岡本、尾藤 OB は笠ヶ岳を攻撃した。

小屋発十二時、大沼乗越十三時半、抜戸十五時四十分、笠岳十七時十分～十七時十五分、双六小屋二十三時三十分

1月4日 小雪

動いて動けない天候ではなかったが、昨日は遅くまで行動したので休養日とし、今後の計画を練ることにした。双六岳の双六池側の斜面でスキーを楽しむ。

今後の予定として、明日天気になればテントを出せる所まで出し、次の晴天を利用して撤収する。明日行動出来ない天候ならば次の行動出来る日に下山することに協議決定する。かゝる決定の是非には非常に問題があったようである。と言うのは我々の数少ない冬山の経験によれば、ここ三、四年の雪期登山に一週間も閉じ込められた例は殆どなかったし、あった時でもその後は二、三日の行動日に恵まれていた。故に公式的には冬山の悪天候は重々理解しているつもりでも実際を判断する時、経験を偏重し、希望的に傾く結果となったようである。かかる反省は停滞中の無聊が重なるにつれ激しくなり十一日山日記の気象の頁を再読した時、最高に達した。

1月5日 高曇

出発 八時三十分

三俣蓮華頂上 十一時

鷲羽ー三俣蓮華コル 着十三時、テント設営後出発十三時四十分

小屋着十六時三十分

A 隊 鷲羽岳頂上十五時、テント帰着十五時二十分

B 隊 黒部谷 十五時までスキーで下り、テント帰着十六時二十分

強風がガスに雪さえ混えていたがトレーニングをとという意味で一応出発することにした。多分小屋の背後の山まで天候はもたないだろうと思っていた。双六岳の傾面を巻き三俣レンゲから南へ数えて二ツ目と三ツのコルに出る。非常に雪が深く、道ははかどらないため、始め計画した夏の横巻道を通るのをやめ稜線に出、アイゼンをつける。

この稜線をスキーで飛ばすことなどは我々のスキー技術をもってすれば到底望のないことである。天候は何處まで行っても悪くも良くもならない。ラッセルで時間をつぶしたので三ツ俣蓮華小屋を通過した所で早くも引き返さねばならなかった。赤牛隊も黒部隊も同じ所に天幕を張った。かくして一週間の吹雪との根気比べが始まった。

A 隊 (赤牛隊) メンバー 柰中 (L)、石沢、四方

B 隊 (黒部隊) メンバー 宍戸 (L)、山本、西川、岡田

夕方の完全な無風状態、微かな音をも吸い込むが如き山波の<sup>たたずまい</sup>佇こそ正に来るべき一週間の嵐の前の静けさであったようである。

1月6日 曇後風雪

小屋では八時に槍に向け出発。

樺沢岳頂上九時

樺沢岳頂上までとにかく強風を衝いて登る。北方後立山は黒雲に覆われ、本格的な嵐の来襲は時間の問題であったのでそれより小屋に引返す。天幕の連中が敏速に動いて居れば小屋まで帰ることが出来たであろう。

1月7日 風雪 停滞

1月8日 風雪 停滞

天幕では少し風が弱くなったのでテントを撤収したが蓮華小屋に辿りつくのがやっとならなかつた。二時間程かかって小屋を掘り出し中にもぐり込む。

1月9日 風雪 停滞

1月10日 風雪 停滞

小屋でもいろいろなものが欠乏し出す。

1月11日 風雪 停滞

1月12日 ガス後晴

四六時中、食事の時と便所へ行く他は眠っているので、昼と夜の区別が判然としなくなってくる。度々、暫く止む風に欺むかれたが遂に三時過から星が見えだした。今日を逃せば本当に大事に到ることを実感として感じながらアタック隊を迎えに行く準備をする。

八時小屋発、蓮華小屋着九時四〇分、双六小屋十二時三十分着、十三時三十分出発、乗越十六時着～十六時三十分

大沼沢の積雪は下りでも腰以上を没する為、行程は非常に捗らない。三十分遅れた最後部は三百米位で先頭に追いつく。日はすでに没し、たそがれが間近く迫る。そこでスキーをはくことにしたが、荷物と技術の相異から先頭と最後の間隔が非常に開く。しかも戦闘でさえ出合に程遠い中腹で暗闇に追いつかれ、再三、道に迷う。懐中電灯は殆どが用をなさず、二、三個が鈍い光を発しているのみ。加えて雪崩の爲地形が一変し、四方、石沢が天幕を張った登山口等跡かたもない。抜戸から落込んでいる急な谷は降っただけの雪を随時、押流すらしい。先頭は出合に二十時頃着く。一時間程待ったが寒さに耐えきれず出発。午前一時頃、例の飯場に着く。後続も二時半には揃ったがスキーの調子の悪い西川、片山は遂に出会迄下れず、途中で穴を掘ってビバークする。

1月13日 小雪

石沢、四方、山田は一挙帰阪すべく七時半出発。残りの者は後の二君を待ち、中尾三時半に帰る。

## 後 記

### I. 大沼沢及びその周辺

大沼沢自体が雪崩れることは先ずあるまいと思われるが、その中腹から抜戸の方に入っている沢は雪が降るとその都度雪崩れている様子であるから、降雪中は絶対近寄れないし、左俣出合に天幕を張る事も出来ない。然し、平年なら十二月一杯なら何とか使えるであろう。それ以降の登路は二千五百八十八・五米のピークより東南にカギ形に出ている尾根しか考えられない。大沼乗越から双六小屋へは横巻道より稜線の方が絶対有利である。

II. 双六小屋より三俣蓮華への稜線はワカンよりアイゼンの方が快調な位雪がしまっている。しかし小屋からの横巻道は雪が深くスキーが最有利であるから計画的に非常にむずかしい。

### III. 黒部源流（雲の平遠望）

### IV. 鷲羽の稜線（手元にデーターなし）

かくして、雲の平の雪も踏めず、薬師沢の影さえ知らず、我々の計画は壊滅した。悪天候にはばまれ、行動日には殆ど夜明けから真夜中迄行動し、悪戦苦闘を重ねたが報いられなかった。然しこの計画が不可能と断定する材料は何もない。希わくば、我々の遺した未完成の山行を、いつの日か補い、喜びを共に頒ち合う日の来たらん事を。

## 冬山停滞一週間

（於 三俣蓮華のコル）

一月六日

朝七時頃目を覚ました。天気はガスであるが視界は利く方で風が少々ある。テントを撤収するつもりで食事の仕度にかかったが、この間に天気は次第に悪化して、風雪に変わって来た。隣にナイロンテントI号（宍戸、山本、西川、岡田）を張っていた黒部源流隊と相談をして天候を見ることにして、この日は停滞と決定。午後七時頃星空が見られ、明日は撤収が出来ると、皆喜び眠りに就く。

一月七日

午前四時頃、隣のテントより、宍戸リーダーの腹痛を知らせて来た。天候は又悪化し外は風雪になっている。宍戸氏自身（医学部三年）虫垂炎ではないかとの判断で、とりあえずナイロンテント2号（壱中、石沢、四方）より石沢氏が手当をしに行く。兎に角、抗生物質でおさえ、2号テントで両方の朝食を作り、風雪の止むのを待ってベースキャンプへ知らせに行く準備をする。昼頃になって、この薬の副作用の下痢で腹痛はとまり、一同ほっと安堵の胸を撫でおろす。この日も結局停滞。

一月八日

目を覚ますと風はあるが、ガスが少しうすれその間からぼんやり鷺羽の頂上が望まれた。早速テントをたたみ出発（午前十時）。しかし、出発して間もなく天気がくずれ風雪がひどくなる。視界は三十米位しか利かない。やっと雪に埋もれた三俣蓮華の小屋を発見。風雪の中を二時間程かかって入口を掘り当てる。中は余り雪が入っておらず、無風状態である。やれやれといった所。小屋の中にテントを張り薪を燃やして暖をとる。（尚石油はテント撤収の際二つのラジウスに一杯満たして残りは捨てる。）

一月九日

天候は相変わらず悪い。この日より停滞が長引くことを考慮して、食糧の喰い伸ばしを始める。トースト一人四枚（一日二食）。砂糖が欠乏しはじめたので塩ミルクにする。燃料は少しはある。煙突を屋根から出し小屋中に充満した煙の逃げ道を作る。

一月十日

今日で停滞五日目、風と雪はやまない。頭の上をごうごうと風がかすめる。小屋の戸口は幾ら除雪をしても二、三時間も経てばすぐ埋れてしまう。この日、朝起きると全員頭痛を訴え出す。小屋の中で薪を燃やすので炭酸ガス中毒にかかったらしい。立ち上がると心臓の動悸が激しく、ふらふらする。交代で戸口の雪かきをする。外に飛び出すとすぐ平常にもどった。この日はトースト三枚に減食、副食は塩とコショウのスープ。

一月十一日

相変わらず風雪が続く。目を覚ますと不気味な風の音が聞えるだけである。食糧はだんだん乏しくなる。停滞日は二食だが、今日から一食につきトースト二枚になる。この調子で後二日の食糧が残るに過ぎない。勿論皆、個人装備の食糧は出し合う。ストーブを囲みながら、皆いろいろ今後の検討をした。終には、「我々は何の為にこのような困難を敢えてしてまで山に来るのであろうか。」など、云い出す者もあり、お互いに話し合ったが結論には達しなかった。又、結論が出る筋合いのものでもないだろう。

結局、「何でもいいから腹いっぱい食いたい。」というのが皆の本当の気持であっただろう。しかし、皆互いに励まし合って我々の現実の立場をそれ程窮迫したものとは考えていなかった。全員明日の快晴を祈って眠りに就く。

一月十二日

六時に目が覚めた。風の音はやまない。又今日も停滞かと、皆げんなりした顔になる。突然外に様子を見に出ていた者が「槍が見えるぞ!!」と叫ぶのが聞えた。皆先を争って外に飛び出た。ガスはうすれ、槍ヶ岳がくっきりとその姿を現した。朝日がさす。皆んなこの感激は一生忘れられないものとなるであろう。

残った食糧を全部つめ込み、我々を救ってくれた小屋に別れを告げた。その時、「ヤッホー」と、皆の安否を気ずかう木村リーダーのコールが聞えた。皆元気な喜びに溢れたコールを送り返した。迎えに来た仲間と手を握り合い、再会の喜びに胸を震わせているお互いの目には涙が光っていた。

— 四 方 大 中 記 —

昭和卅一年十一月廿八日

## “鷲羽岳アタック”

### 四 方 大 中 記

風は可成りあったが天気は晴、我々はアタック隊、サポート隊を含めて総勢十四名。午前八時過ぎ双六小屋を出発。稜線沿いに三俣蓮華を経て、鷲羽岳と三俣蓮華とのコルにテントを設営したのは正午を三十分廻っていた。何しろベースキャンプに入るのに一週間の停滞を余儀なくされ、結局十一日もかかっているだけに、最初の目標であった水晶、赤牛のアタックは不可能と見られ、その結果、目標を鷲羽岳に切り換えた訳である。

さて、鷲羽のアタックは空中(リーダー)、石沢、四方の三人。サポートは木村リーダー、村瀬、片山の三名で、結局アタック隊のテント地出発は、午後一時三十分。鷲羽の登には相当長く、稜線の風は強い。ルートは大体夏道を探ったが、頂上に近づくにつれて風の当たる所は凍りついており、所々岩肌が顔を覗かせている。途中一度休んだが寒いのですぐ又黙々と登りだす。三時遂に頂上に着く。視界はよく利き槍穂高をはじめ、北アルプスの峰々がきれいに見える。二十分程頂上に留まり記念撮影などを済ませた。この間写真のフィルムを入れ換えていた石沢氏の手がみるみる紫色になった。

何だか物足りない感じがしないでもなかったが、これ以上アタックを進めることは大した意味もないと考えられ、又帰りの時間も考慮して吹きやまぬ風の中を凍り初めた雪にアイゼンを利かせながらテント地に向った。

## 食糧報告

岡田博司

積雪期登山における食糧は、一般に登山食糧が備えるべき全ての必要な条件を具備すると同時に、更に、一般に積雪期登山が特に要求する諸条件にも対応して行かなければならない事言う迄もない。しかして、食糧計画が一個の具体的な登山計画をその基礎として樹てられる以上、根本たる登山計画を適確に把握し、如何にその計画の個性に応じた具体的な食糧計画が成されるかは、常に重要な問題であろう。

今回の計画に当っては、参加人員が意外に少なく荷物のボッカに多くの力は望めないし、更にはアタック態勢の速やかな確立に引続くアタック隊の独力による縦走という形式をとる事に着眼し、食糧計画のポイントは軽量化、アタック隊食糧については、特に調理の簡易化という点を中心に考えるべきとした訳である。

食糧の軽量化は梱包と食品について考えられるが、食糧計画自体が如何に綿密な検討をへて、あらゆる予想される事態に対処し得、しかも余剰食糧を最低限度にとどめ得るかと言う点が最も大切なところである。

梱包については、C1 迄のボッカに堪え得る程度を目標とし、大巾にポリエチレンを採用すると共に、個々の食品についても可成りの考慮を拂った積りである。結果的に荷物の軽量化は装備の分野において特に有効になされたものと思うが、しかし食糧の分野においても漸進的に改善を試みる必要のある事は言を俟たぬところであって、例えば、新たな梱包方式の採用とかアタック隊食糧には特に科学的食糧を使用して見るとかいった点についても充分研究をなす必要があると私考する。

一方調理の簡易化については、アタック隊食糧において顕著に見られるところであるが、主食はクラッカーを主体とし、これに食パンを配すという形をとり、副食にあっても至って手数の掛らぬものばかりを採用した。

しかしながら、かかる方法は今度の登山計画自体が特に要請するところに即応して採られたものであって、如何なる登山計画にも対処して行けるものではない事はもとより、一つの点に固執するあまり、登山食糧が当然備えているべき他の諸点において欠陥が出て来たのでは意味がない。登山食糧の最大の要件は重労働に堪え得るカロリー

一という点にあると思うが、今回の食糧においてその点は兎も角としても、その他の点、例えば栄養のバランス、嗜好とのバランス等は可成り等閑視されていたという事は或る程度迄は致し方なしとしても、当然反省されるべきところである。





# 春山合宿

——1955年——

## 春の黒部下廊下横断について

宍戸元

雪晴れの朝新越乗越から見る景色は実にすばらしい。その中でも劔が源次郎を中心に平蔵谷、長次郎、八ツ峰と、凸凹を激しく浮き出させ、これを男性に例えるなら、そのずっと下、黒部溪谷との間に座を占める内藏之助平は清らかな乙女にも例えて良いだろう。その純白な肌を見せる乙女の前には右に大ダテガビン、左に丸山の大岩壁のナイトが聳え立っている。私達はいつしかこの乙女の魅力、いや魔力の虜になっていた。

冬の穂高で多大な成功を取めた私達は、欣喜雀躍として“ふるさと”とも言うべき後立山へと、又再び大沢小屋へ立戻って来たのである。

この行動は意識的に考え出されたというよりも、知らず知らずの間に期せずして私達お互の心に芽萌えた、もっとも自然な流れであり、誰の脳裡にも不思議さも、疑問も生ずる余地はなかった。

かくて、私達は後立生活の間に記憶に残った岩小屋沢岳北峯から西北に派生する長大なしかもゆるやかな尾根（岩小屋沢岳支脈）に眼を注いだのである。更には又、岩小屋沢岳といえば、すぐに新越尾根に結びついていった。この尾根は既に逆縦走の際サポートに使用し、既に私達の自家薬籠のものになっていた。次第に考えはまとまり、大沢小屋をベースとして新越尾根—岩小屋沢支脈—黒部下廊下—内藏之助沢—同平—という線が地図の上書き込んだ。

## 五四年

五四年春は、多数の卒業生を送り出すなど参加者の都合より A 隊（川島（L）、山本（光）、土屋、久保 OB、田島 OB）、B 隊（尾藤（L）、宍戸、広橋、三枝、山本（進）、西川、岩永）に分け、A 隊は岩小屋沢岳支脈の下降偵察行を計画した。しかし同支脈二一〇〇米に AC を出したが、計画不備と食糧不足のため、数日振りの快晴の日に撤収を余儀なくされた肝腎の黒部への下降路を発見出来ぬまゝに終わった。

B 隊は三名の横断アタック隊を出す予定だったが、アタックメンバーの中に病氣不参加が出るなどしたため、計画を放棄し、翌年に備えて A 隊の果たせなかった偵察を続けることとした。そこで新越中尾根に AC (一、八〇〇米) を出し、新越沢を下降したが、黒部別山を望む所、黒部本流への落口も間もないと思われる地点で、止むなく滝のために下降を断念し、岩小屋沢岳支脈末端から新越沢に出ている二本の平行ルンゼを登った。——このルンゼは主稜線上からも一目でそれとわかる特徴的なものでこのルンゼの頭が支脈のほゞ末端であろうと思われる——。私達はこの頭 (ドーム) (一、八〇〇米) より下廊下唯一の泊場である榛木平を樹間にちらちらと見るに止まり黒部本流の河原にさえ降り立ち得ずに引返した。(ルート図参照)

この五四年の偵察の結果、私達は無雪期の間徹底的に後立山から黒部への下降路の偵察、特に、下廊下から逆に後立側に取付いて見る必要性を強く痛感した。何故ならば、どこにルートをとるにしても下廊下右岸を形成している一、三〇〇米から一、八〇〇~二、〇〇〇米までの壁が常に問題になるからであった。そこで夏の下廊下偵察となり、尾藤 (L)、小沢、坪井、東、壺中が、棒小屋沢から榛木平にはいり、そこにベースを設置することとなった。その時の尾藤の記録から引用すると、下廊下横断に関し、全く白紙に戻って考え始めた。榛木平生活一週間の偵察活動の推移は、黒部下廊下横断に関する決定的な事は、先ず渡河自体は吊越の出来た現在、スノーブリッジを利用するよりは吊越が優先する事は問題にならず、その存在する場所であること。次は立山側に於いてはクラノ助沢を利用するのが最も容易である事から、此処に鳴沢小沢出合にて渡河し、クラノ助沢に出る線に対して後立から如何にしてこの部に下り立つかという点に焦点はしぼられた。勿論逃げ道の事も考慮に入れてである。

即ち、鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定したが、其處より内藏之助沢出合までの部分及び吊越使用不能を考えると鳴沢出合の方が有利なので、一応鳴沢に下るルートを考えて。次に、鳴沢兩岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙に傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸より高度が低いので極めて条件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登ってみると、何とか春の登降が出来るだろうということが分った。所が主稜線寄りの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので赤沢岳に近い部分は非常に傾斜が急で而も鳴沢右岸をなす、鳴沢尾根より遙かに長いものであった。恐らく春には BC となるであろう新越乗越の事を考え合せると、一層鳴沢尾根の方が良いと言えよう。かくして此處に新越乗越より鳴沢岳に登り鳴沢尾

根を下って、その末端より急斜面を鳴沢に下り、その出合の吊越を渡って、立山側は内藏之助沢より内藏之助平に至るルートを考えて訳だった。

しかし、谷底とブッシュに視界を妨げられた偵察は、盲人の象を触るの図に等しかった。鳴沢尾根を登った時などは、その帰路に於いてさえどうかすると道を誤る位で、複雑な地形で、しかも五万分の一でも細部に至るまで正確であるとは言い切れない後立山黒部側において、とてもそのルートを正確且つ精細に把握することは至難な技だった。

そこで黒部渡渉点（鳴沢出合の吊越）を中心に全ルートをトレースすべく同年秋偵察隊を二パーティ（立山側、宍戸（L）、佐谷、住吉OB、後立山側、坪井（L）、西川、戸井、田島OB）出し、鳴沢尾根の全貌を知る事に努めた。

こゝで、私達は未知の土地を歩き且つ偵察することにより部分的に知る事の出来た知識を一つのものに、集成していくのが如何に興味あるものであるかということがわかり出して来た。それとともにもはや既に登り尽された感がないでもない北アルプスに於ても、まだかゝる未知の世界の存在すること驚き且つ喜ぶと同時に、冠松次郎氏、堀田小原氏など先人の努力に敬意を拂わずにはいられなかった。

## 五五年

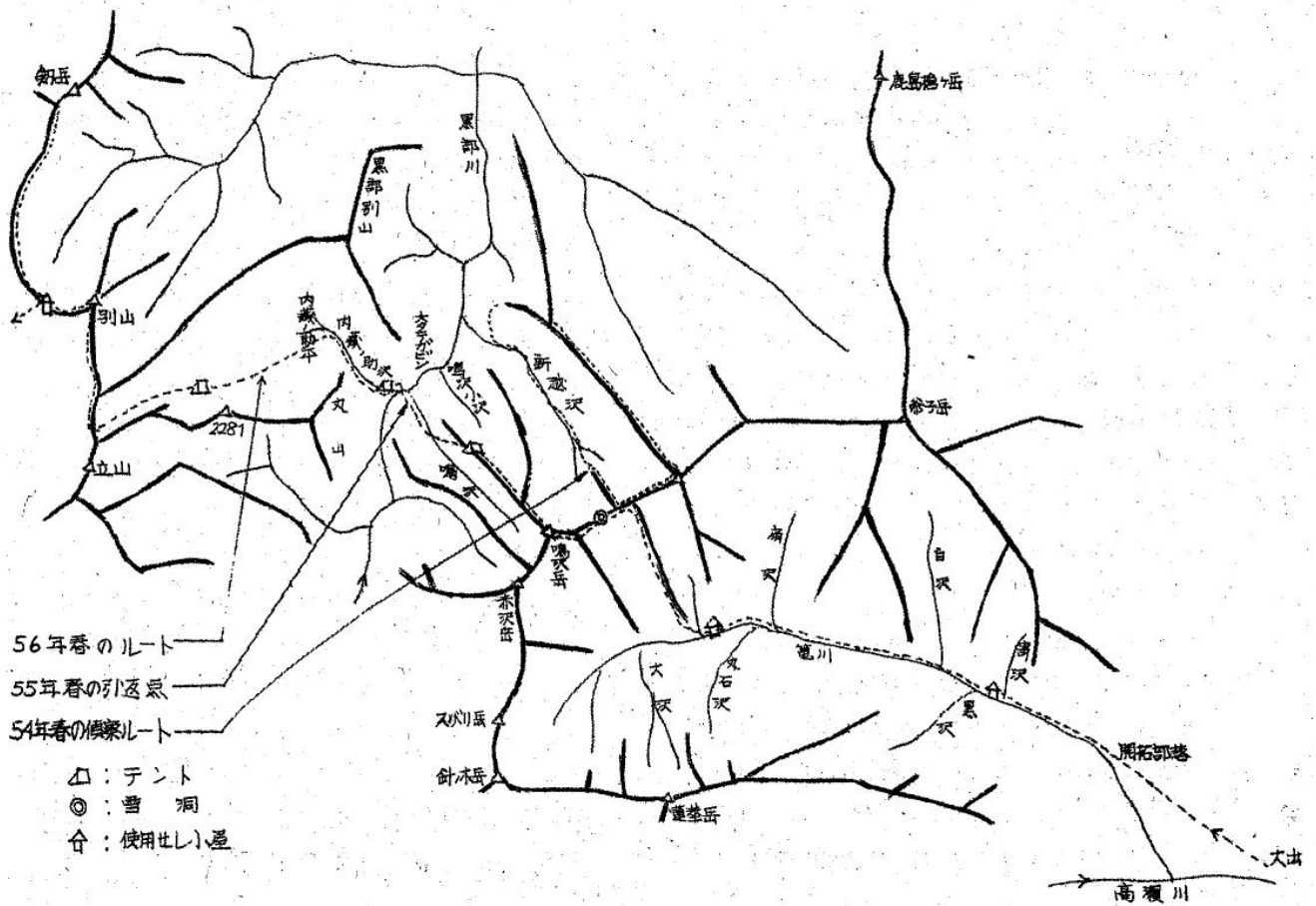
かような状態において五五年春の黒部横断計画（宍戸（CL）、木村（SL）、坪井、西川、山本（進）、三枝、四方、岡田、村瀬、寺田、和田、尾藤OB、東OB）となった。この時は有力メンバーをフルに使えたため、大沢小屋をBHとし、内藏之助平に最終キャンプを置き、剣をアタックしようという遠大な計画であった。だが、一、二〇〇米と高度にある下廊下の積雪について若干の予備知識に欠ける点がないでもなかった。ただ前年の春新越沢を歩いて見た感じから、ピッケルも、アイゼンも役に立たない湿った重い雪であろうと推測した事は誤りではなかったのだが、同じ位の高度にある籠川谷の扇沢出合とか、弥陀ヶ原称名滝に比べて、三、〇〇〇米の山々に囲まれた下廊下は前者に数倍する積雪量のあることは全く予想外のことであった。そのため前年秋に補強工作を行って置いた吊越は滑車が立山側で雪にうまっていたため働かず、スケールの大きな下廊下にあっては他の渡渉の手段もなく計画は失敗に終わったのである。それに加えて下廊下は積雪が多いにもかゝらず、気温は矢張り一、二〇〇米並の温かさのため、湿った重い腐った雪は私達に色々と不愉快な思いをさせた。樹間、陽の当る

場所、北斜面、ラビーネン・ツェグと雪の性質は千変万化の態度を示し、私達は片時もそれに注意を拂わずにはいられない。更には雪崩とシュルンドの間から見られる怒濤に気を配らなければならない。換言すれば、岩と氷の稜線と同様に、いやそれ以上の精神の集中を必要とするのである。即ちかゝる積雪期の谷歩きに於てこそ、自然は我々人間にもっともデリケートな神経を要求しているのかも知れない。又、しかしその反面、春の黒部のように、どこを通過して帰るにしても三千米の稜線を越えなければならない。いわば井戸の底にあって絶え間ない水の剛音を聞きながらも、それに動じないタフな神経を持ち合わせていなければいけないのである。

## 五六年

下廊下について知るものを知った私達に、五六年春には「成功」という一言がやってくるのである。前年の秋に前回の轍を踏まぬよう滑車を後立山側に留置いたのが功を奏したのである。この横断ということにおいて、吊越の状態如何が、成否の鍵を握るといっても全く過言ではないとつくづく思うのである。

この年の春は参加者が少数のため、前回のような往復ということは不可能であり、計画を大幅に縮小し、アタックが鳴沢出合より内藏之助沢、立山稜線、彌陀ヶ原と走ることになった。



## ◇ 行 動 報 告

### メンバー

アタック隊 (L) 宍戸 元、(装) 西川元夫、(食) 岡田博司

サポート隊 C2 (L) 坪井圭之助、山田良平、広橋 茂 (OB)

C1 大井孝和、一山幸代、田島 汎 (OB)

三月一九日

宍戸、坪井、岡田、山田、大井、一山、大阪発

三月二〇日 (雨)

二十年振りの大雪とかで、開拓部落のはずれ辺りからラッセルがある。寄沢飯場泊り。

三月二一日 (晴)

新越尾根と扇沢のほゞ中間、籠川本谷左岸の台地に関電の小屋が新築された。新越尾根を使うに際し、大沢小屋より万事都合がよいので此處をBHに変更した。

去年大出、大沢間の荷上げに、貴重な五日間というものを浪費したため、今度はこの間だけ人夫を雇うことにした。私達は寄沢から大沢にはいるが、人夫は大出からトレースを傳って追いかせさせることになっている。宍戸は人夫との打ち合わせのため単身大出に出る。約束の人夫三名は既に大出にやって来ていた。大町案内人組合の規定で自分の個人装備（二貫）を含めて六貫しか担げないというのを、事情を説明し、十貫づつ担がせた。やっと荷造りし初めたかと思うと、今度はこの荷物では関電小屋まで三日の行程だといひ出す。止むなく日が暮れたら途中でデポし、荷を軽くして、関電小屋にはいるという線で納得させる。一人の人夫においてはカメラを肩にかけ、一体何をやりに来たのかと詰問したくなる。白沢に大半の荷物をデポし、六時半頃到着した。

三月二二日（晴）

後発、田島 OB、広橋 OB、西川、十貫の荷を持って到着。前夜、夜汽車に揺られてきたこと、昨日の人夫のことを考えながら、三人の労をねぎらう。

先発隊は荷物の整理を完了する。

三月二三日（晴）

BH-C1、荷上げ。C1 は例年雪洞を設営している主稜線の信州側に建設する予定で取あえずデポする。今春は沢では積雪が極めて多いにもかかわらず、稜線上では鳴沢岳、岩小屋沢岳辺りでは既に夏道が顔を出している。

三月二四日（雨） 停滞

三月二五日（雨） 停滞

三月二六日（雨） 停滞

三月二七日（晴）

全員 C1 にはいる。雪の少ないため九名はいる雪洞をつくるのはいさゝか難澁する。いつもやる阪大方式をやめて、斜面と平行にトンネル式の雪洞を苦心して作る。少々時間がかゝったが快適なのが出来た。

三月二八日（晴）

雲海の上に針の木、蓮華がかがやいている。一面の雲海が少しずつ薄らいで先ず大沢が見え、次いで竈川が大町へと姿を露してくる。出発する日には雪で覆れていた大町が黒く見える。朝餉が一條の煙がたなびいている。さらに遠くは四阿、根子、浅間、八ヶ岳、富士山が雲の絨壇の上に頭を出している。カシャ、カシャとシャッターの音を響かせて見る。

黒部はと見ると内藏之助平、丸山、黒部別山、劔と昨年のおまゝに、白と黒の縞模様を巡らして静まり返っている。アタック隊とC2隊はC2にはいり、C1隊の田島OB、大井がサポートしてくれる。一山はC1・C2間は鳴沢岳を越える悪場のある上、昨年よりテント間隔を延した所でもあるし、帰りに時間を喰い、悪場を越える前に、日が暮れた時のことなどを考え、キーパーをさせる。この様な快晴に一人雪洞にいるのはさぞ退屈でたまらないだろうが、彼女なりに能力に応じて山の味を満喫してくれれば幸いである。

三月二九日（雨）

C2 停滞

C1 停滞

田島は会社の休暇がなくなるので単身大町に下山。

三月三〇日（曇一時雨）

C2のテント場は、南は針葉樹の大木に囲れているが、北は断崖をなして鳴沢小沢に落ち込み、左手から鹿島槍を始めとして後立山の遠望が出来るすこぶる見晴しの良い處である。西はと言うと劔は樹の影で残念ながら見えないが黒部別山と、その正面に別山沢を懐き、その下には下廊下の心臓部が続いている。こゝに去年は二ヶ所のスノー・ブリッジがかゝっていたが、今年はすっかり埋ってこゝでも大雪の年だということがはっきりと理解させられる。しかし空はと仰げば乳色を呈し、それが鹿島槍のあたりから次第に稜線に融け込んで、山と空の境界が不鮮明になってくる、という、あまりはかばかしくない空模様である。西の空がいくらか明るいのに望みをかけて出発する。

アタック隊は個人装備、サポートの三名は、アタック七日分の食糧装備をもって、一人平均三～四貫の至って軽い荷で鳴沢尾根を下降する。やがて私達は前衛華道のオブジェにでもなりそうな白骨樹をメルクマールに左折し、鳴沢右岸の急斜面へとルートをとっていく。例の湿った雪と岩、その間に永年の間に累積して出来た腐触土がはさまって、この三者が何の関連もなく混在しているこの斜面は昨年同様私達に苦澁を与える場所である。ザイルフィックスをして、雪の上にはステップを切って一步一步慎重に下るが、そのステップも腐れ雪のためバカでかいのを作らないと物の役にたたない。馬蹄状の岩壁の上を右に二ピッチトラバースすると、この斜面から徐々に隆起し、次第に大きな尾根をなす私達が末端尾根と呼ぶ起始部に到達する。

こゝには一昨年秋の偵察隊のつけた大きな鉈目が残っていたので、地点の確認に役立った。ここからはザイルの助けもはなれ鳴沢に一目散に降ればよい。

午後一時、又一年振りに鳴沢出合にやって来た。対岸はと眺めれば水面からオーバーハング状に切り立っている。その高さは三十米もあるだろうか。その壁の上から二、三米のところ私達の頼りとする吊越のワイヤーが顔をのぞかせている。しかし私達が秋に補強した兩岸にわたして置いたたぐり綱は見るも無慚に後立側で切断されて奔流の只中に垂れ下がっているではないか。だが滑車はちゃんと手のとどく所に健在であるのは何よりだ。早速渡河用に用意した補助ザイル（六十米）を出して工学部の西川が技師長となって早速渡河工作にかゝる。

落着いてもう一度対岸を見ると氷雪の壁の下には雪融けのためか濁流が渦を巻いて流れている。昨年は印象的だった雪帽子をかぶった流れの中央の岩も、ザイルフィックスをして水汲みにさえ、降りられた河原もすっかり濁流にかくされている。更には氷雪の壁に黒くべつとりと印されている土砂の具合から一時の物凄い増水が推察され、ただただ自然の威力の大きなことと、その壮観さを想像して今更ながら驚くばかりである。

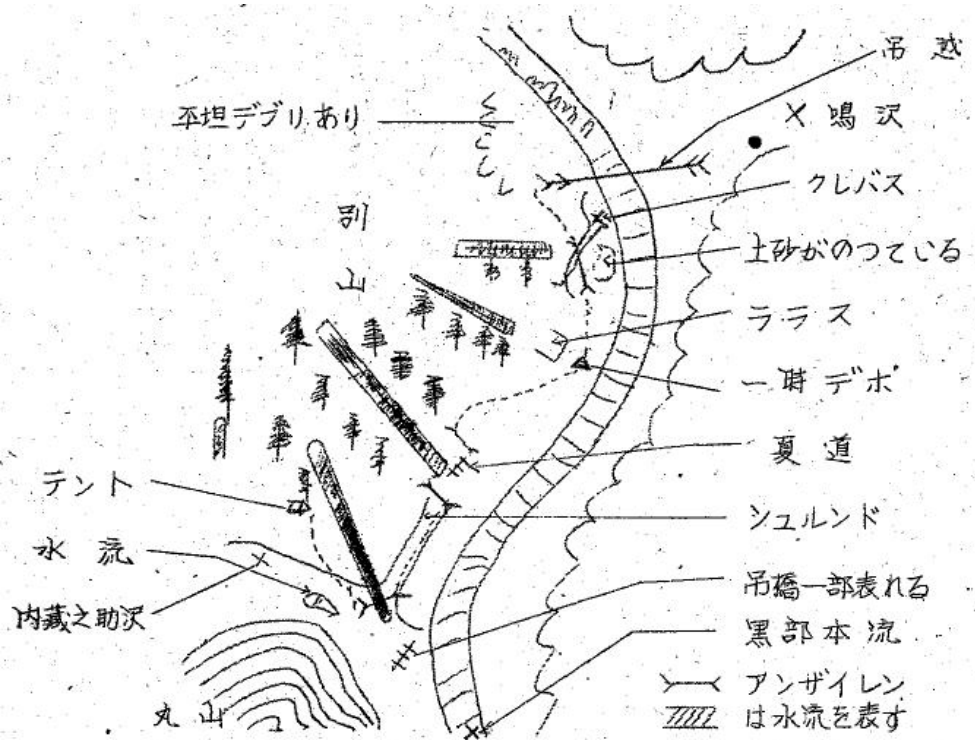
一時半、トップの坪井が十の瞳と一ヶのレンズの注視のもとに滑車をたぐっていく。立山側がやゝ低くなっているのも思ったより楽に進んでいく。六十米の補助ザイルの延び切った時に思わず兩岸から万歳の声があがる。私達の仲間にはかわからないこの感激のシーンを記念すべく折から降り出した雨にカメラのぬれるのもかまわず何回も何回もシャッターをきった。吊越は小さな滑車とそれに吊り下げられたブランコの腰掛を連想するような粗末な止り木から出来ている。それに身を委ねて急流の上を渡るのは決して心持良いものではないが、一人ずつ、それからリュックを一個一個と渡し、三時、私達は濁流をはさんで東と西に別れた。

#### 《以後アタック隊の記録》

遂に降り出した雨にずくずくに濡れたアタック三名は吊越地点を後にした。濁流からの灰色の空に吸い込まれている鳴沢の壁が、鳴沢の左岸から下流へとつゞき、奔流の左に転ずるに沿って折れ込んで視界から去っていく。右手は黒々とした赤沢の壁が根元に雪を蓄え、それが堤になって立山側と同じように濁流につゞく。そしてこの壁は鳴沢右岸へと移っていく。ここには赤沢尾根に鳴沢から登る僅かな、しかも唯一の可能性のある所のように思われるが、実際に取りついたら例の不安定な雪にさぞ悩まされることだろう。



私達は、本流左岸の雪の急斜面を内蔵之助沢の出合を目指してトラバースを開始した。雨のためか、気温の高いためか、恐らくその両方のためだろう雪はたっぷり水を含んだ腐れ雪で、ピッケルを根元まで突きさし、脚を前に出すと、足頸と



膝の中間位までもぐって、それでどうやら安心出来る足場になる。それを待って反対側の脚を出して同じ動作を繰り返していくわけだが、下が切り立った堤であり、その又下は折からの雨で水かさを増した黒部であれば、いやでも慎重にしないわけにはいかない。若しスリップすれば遙か下流の仙人ダムで水死体として発見されるのがオチなのだから。それでも上部がすぐ針葉樹の森林帯でもあり、デブリが余り出ていないのが、せめてもの慰めであった。鳴沢の出合から一転した所で一坪あまりの平坦な場所を見付け少憩。ここにリュックを置き空身でルート of 偵察。その結果、部分的に出ている夏道を発見し、例のいやな雪面から草付を倒木に沿いアンザイレンして取りつく(半ピッチ)、更に一ピッチ同様な斜面を降り、今度はシュルンドの中を進んだ(ノンザイル)。この辺りから日が暮れ、一層行動に困難の度が増して来た。

しかし、私達はどうしても出合に行かねばならなかった。かゝる雨で融けたり、くずれたりする雪の斜面は一時間でも通るのが遅ければ遅いだけ通りにくくなるので一刻も早く通り抜けるのが賢明な策であると思ったからだ。最後に濁流に突き出た岩壁を、西川の電灯に導かれてトラバース(一ピッチ)、ようやくにして七時出合についた。

夏ならば棧道と河原を歩いてたった三十分ばかりの行程を正味三時間もかかってしまった。雨はやんだがずくずくに濡れた私達は、ふるえながら、不二家のソフトドーナツを食べた。油で揚げたドーナツはかさかさもせず、つめたくもなく、おいしい筈であるが三つも食べるともう食べる気がしなくなった。内蔵之助沢の左岸を少し登り森林帯の最下端の一かかえもあるような針葉樹の根元をならしてテントをはった。急

斜面ではあるが森林帯である上に積雪は案外少ないし、その上用心に大木の根元を選んだので雪崩には絶対安全である場所ではあるが、やはり気分的に快適なテント場というものではなかった。

それでもラジュウスが快調な音をたてて湯がわく頃にはすっかり元気も回復し、胃袋が満足する頃には既に夜中の一時になっていた。

三月三十一日（曇）

昨夜は夜半になってもクラストせず、元気も一向に冴えないので明日は予定の停滞とばかりぐっすり寝込み、起きた時は既に十時をまわっていた。

大阪での計画では雪崩を裂けるため内蔵之助平は昼間は歩かず、快晴の日の夕方から行動をおこすことになっていた。しかし実際には宵の口にはまだクラストせず、むしろ明け方から午前九時頃までに通過するのがもっとも安全であるように思われるので、それに沿って計画を変更した。

昨年も、今年も鳴沢尾根を行動中に毎日幾度となく雪崩れていた丸山の大岩壁が、一日中ずっと静まりかえっている。もはや今年は雪崩の大きなのは出尽くしたようだ。しかし丸山から出ているデブリは扇状に拡がって右岸を埋め尽し行動中に見舞れたら絶対に避けられそうにない。夏道は右岸即ちこのデブリの下にあるのだが、こゝはかなりはっきりした台地を形成している。夏歩いたときにはブッシュに邪魔されてよくわからなかった地形も、今眼前にしっかりと焼きつけられる。デブリは扇の要に近い方で直角に横切った方が安全だし、それに第一沢通しより楽そうなので結局はほゞ夏道通りつまり台地の上を通ることに決めた。岡田が朝食用にコーヒーをテルモスにつめるのを待って午後四時就寝した。

四月一日（曇のち雪）

案の定、一時間寝坊したが、シラフから顔だけ出してするコーヒーとクラッカーの食事は意外に早く時間をかせぎ午前四時に出発出来た。歩いている間に東の方新越乗越の方から空が白み出して来た。今や所をかえて後立の稜線を眺めているわけだが、山肌は樹木が一面に出ていて、雪山のすばらしさが少しもない。籠川谷から見るとまとまった美しさを見せる鳴沢岳も平面的でいささかがっかりする。ただ赤沢が猫の耳を中心に所々雪のついた岩肌を見せて周囲を圧している。しかしクラノスケ谷というところは案に相違して実に明るい谷だ。もしこれで雪崩という危険を考えないでよいとしたら私達を文句なく有頂天にさせてしまっていたに違いない。兼ねてから問題だ

った内藏之助平入口の滝も九分通り埋っていて簡単に通過し得た。もし積雪が少なくて出ていたにしろ右岸にルートをとれば容易に通過出来ると信じる。

夏本流から梯子谷乗越への分かれ道の辺りで小休止、出合からたった一時間四十分で来てしまった。余りあっけないのでびっくりする。流れが顔を出しているのでも水を汲んで飲む。“うまい”。平の中央部のこのあたりは針葉樹、岳樺があり、どこを向いても雪崩の危険は全然考えられないが、特に丸山よりがテント設営には快適と思われた。晴ていれば朝日がさし染め、雪面がキラキラと輝いて絶好の景色を展開させるだろうにどんより曇った空には望むべくもない。それどころか真砂、立山の稜線から空模様があやしくなって来て、七時遂に風と共に雪が降り出して来た。稜線は時々すごい風の音をさせ吹雪いているようだし、幕営することに決めた。丸山の西二、二八一の三角点から出ている尾根を廻った所、三田平を小高くしたような台地の上である。

四月二日（快晴）

吹雪の割に気温が高くテントの中はすっかり水びたしになってしまった。こんな時にはナイロンテントほどみじめなものはない。つめたいシラフの中でこの朝ほど待ち遠しかった朝はない。しかしお陰で待望の朝日に輝くクラノスケと後立を見ることが出来た。飽かず眺めては時折シャッターを切って三人共なかなか出発する気にはならなかった。梯子段乗越を通らないで、直接内藏之助源頭のカールをつめ二時半稜線に立つ。稜線間近で鹿島槍を眺めながらラジウスで沸かした茶の味は何とも忘れがたい。稜線は風こそ強いが彌陀ヶ原には天狗から室堂、一越と一筋のシュプールが出て、スキーヤーたちが春スキーを楽しんでいるらしい。別山乗越には川島先輩が三人を待っていた。思いがけなかったことなのでびっくりする。当然のことではあるが夜遅くまで四方山話に花が咲いた。小屋の屋根に吹きつける風の音を子守歌に乾いた蒲団はあるし、すばらしい睡眠をむさぼることが出来た。後は彌陀ヶ原を一目散に下ればよいのだ。

# 1956年度 冬 山 合 宿

その一 北岳

その二 八方尾根

その三 富士山

## 北岳バットレス

一九五五年の夏、我々は北岳大樺沢に合宿、バットレスに遊んだ。その冬引続きバットレスをやれとの声もあったが、この計画は実施されるに至らなかった。そして北アルプスの双六をベースとして計画を展開しようとしたが、天候が我に味方せず、大自然の前に我々の無力を嘆く他なかったのである。この新しい考え方による山行も当初の計画完遂こそされなかったが、後に続く者に数多くの課題を残して春を迎えた。

南アルプスの冬の好天を慕ってか、数年来続けられて来た雪の黒部下廊下の井戸の底の様な重圧の下での登高が達せられた反動としてか部内には部が生まれて以来伏流として流れて来た冬の北岳バットレスという問題が話題にのぼり出した。とにかく広大な大空の下、三千米の高さで、岩と雪と氷を相手にと云う事は我々にこの上ない魅力として働きかけた。

夏山の報告会も済んだ九月八日のリーダー会に於てはアプローチルートとして釣尾根を使うことなど行動計画の大項が決められ、細目に関しては、偵察の結果及び文献研究に依って決めることになった。

秋も深まり山はとっくに白化粧した十月二十八日から一週間バットレスの偵察、池山小舎への荷上を目的として一パーティを送り、夏に踏まなかったeガリ→第四尾根→cガリのトラバースルートをつけ、BHとする池山小舎へは米30kg、クラッカー8.5kgが荷上げされ、多量の薪が取り入れられた。

この間にも東京聖峰会から丁重なる御教示の一文をいただいたり、雑誌ケルンの小谷部氏の記録や関西学連報告などの文献などにもより計画は着々と出来上がり、我々は冬を待つのみとなった。

参加人員は二年部員以上十四名が予定されていたが、合宿直前になって流行性感冒に罹病するもの多く、最後的には五名となり（その外、OB二名）先発の五名は二十三日篠田先生や先輩方に送られて大阪をあとにした。

メンバー 西川元夫 (CL)、村瀬泰弘 (SL、経理)、樋下重彦 (装備)、山田良平 (食糧)、大井孝和 (記録)、広橋 茂 (OB)、関本靖裕 (OB)

## 合宿中の天候

12月24日 晴、トンネル出口から見た北岳にはガスがかかっていた。

” 25日 晴、午前中稜線は以前ガス。

” 26日 快晴、稜線は強風。

” 27日 快晴、弱風、15時頃一時巻雲拡がるも日没後再び快晴、風が吹き出す、太平洋側は終日雲海。

” 28日 午前中快晴、太平洋側雲海、午後鉛色の空となり、15時頃一時雨。

” 29日 2時より9時まで降雪、その後季節風猛烈に強くなり快晴となる。

” 30日 快晴、夜半より降雪。

” 31日 午前中晴、太平洋は雲海、午後よりガス。

1月1日 晴、午後巻雲出る。

” 2日 高層雲の曇り、19時より降雪。

” 3日 晴、巻雲。

## 行動概略

24日

身延線の一番で甲府着7時45分。自動車の交渉に手間取り甲府通運の大型トラック一台をチャーターして9時45分駅前より荷物諸共乗込む。市内はシートを下部のまま通過、町はずれまで来てもう出てもよいとの合図で全員顔を出すと富士が直南に我々の壮途を祝福するが如く仰がれる。第二のトンネルを出て登山の道の分れる所で自動車を降り昼食。予想していた雪は全くなく拍子はずれだ。鮎差で一橋大の撤収して来たのに出逢い、荒川小舎には國学院大学が下って来ていた。上では10日間以上悪天候が続いていたらしい。

甲府駅 (〇九四五) →夜叉神隧道 (一一一〇~一二〇〇) →鮎差 (一三三〇) →釣橋 (一五〇〇) →荒川小舎 (一六〇〇)

25日

起床5時、7時出発。各自40kgの荷にあえぎながらもよく頑張って急坂を登り切る。坂の氷には滑って消耗した。下ったパーティのラッセルが使えて大いに助かり昼過ぎ

に池上小舎に着く。池はきれいな雪原となっている。秋につくった薪もかなり残っていた。15時より西川・村瀬・樋下の三人が荷上に向う。二五〇〇位迄登ってデポし電灯の灯で小屋に帰る。

荒川小舎（〇七〇〇）→急坂上（一一四五）→池山小舎（一二五〇）

山小舎（一五〇〇）→デポ地（一七〇〇）→池山小舎（一八〇〇）

26日

天気良く9時出発。南特有の森林中の登高が続く。寒さがひしひしと身にこたえる。梢を轟々とならしている風も時々木々の根元を吹き抜けて粉雪を舞い上らせ我々をちぢみ上がらせる。森林限界をはずれると風が物凄い。砂拂の上に立つと急に視界いっぱい飛込んでくるバットレス。満々と粉雪を藏したガリー群。氷と雪をまとった岩の黒い横じまの形相。思わずファイトがみなぎってくる。釣尾根ではさんざん雪煙に叩かれた。

キャンプは二九五〇のピーク直下の台地でテントは南北に一行に設営する。

後発の広橋、山田は荒川小舎に入る。

池山BH（〇九〇〇）→デポ地（一一〇〇）→砂拂の頭（一三〇〇）→二九五〇のピーク下（一六〇〇）

後発隊

夜叉神（一〇〇〇）→荒川小舎（一四〇〇）

27日

風もおさまり快晴、気持ちの悪いほど好天が続く。関本、樋下、大井はデポ地からの荷上、西川、村瀬がバットレス取付までの偵察に向う。秋の偵察により、第五尾根のトラバースには、とにかくeガリのカツオブシへ到達しなければならない。八本歯コル附近の地形は複雑で最初釣尾根を登ってeガリを直接上から下ってみる。ところが少し下ってみるとラッセルが腰まであり、その上積雪が不安定で表層雪崩を起す始末。危く逃れこのルートを諦めた。この後幾度か釣尾根からeガリに下るルートを試してみたが、なかなかこれほど云うのが見付からない。陽も傾き今日はこれまでと釣尾根を下っていくと下にそうなのが眼につく。八本歯のコルから頂上側へ数えて三ツ目のコブから出ている沢だ。とにかく明日のことだとテントへ戻る。頂上側から八本歯コルへの下りに20米のフィックス。荷上に下っていた三人もすぐ近くまで登って戻って来ていた。日もとっぷり暮れから後発隊の広橋、山田が到着。これで全員七名

となった。午後巻雲が拡がったが、この頃には再び快晴。ふる様な星空の下、釣尾根に三つ並んだテント。風が吹き出す。

#### 偵察隊

AC (一一三〇) → AC (一五三〇)

#### ボッカ隊

AC (一〇五〇) → デポ地 (一二〇〇~一二五〇) → AC (一五五〇)

#### 後発隊

荒川小舎 (〇七三〇) → 池山小舎 (一二一五~一二四五) → AC (一九一五)

28日

この日も午前中は快晴だった。アプローチルート上の偵察に西川、村瀬、山田。間ノ岳へ関本、樋下、大井。テントキーパーは広橋。

昨日の沢を先ず 20 米ばかり下って左へトラバース。小尾根へ出て雪を落しながら下降とトラバースを繰り返す。とうとう e ガリに下りついて e ガリを仰ぐと幸運にもカツオブシの 20 米下だった。もう一息と第五尾根のトラバースにかかると、とたんに雪が悪く無情にも岩がピッケルを拒む。秋の赤旗を発見してルートを確認。陽は既に釣尾根の彼方に没し、気温がグンと降るのを覚える。

間ノ岳隊は釣尾根より稜線に上る。稜線は雪が飛び去って夏道が出ている處もあった。間ノ岳頂上附近は氷となっていた。風は強く大井は中の岳の先より引返し、他の二人は間ノ岳頂上まで行き北岳の頂上に寄って帰幕する。

この夜、テントの中では間の岳の話しにはずむ。ラジオの天気予報は気圧の谷の接近により明日の天気の悪化を報じている。第五尾根のトラバースルートもやっと半分つけただけだし、もう二日晴れてくれればと祈る。天気のくずれないうちに是非とも攻撃を終えたいものと気ばかり焦る。新雪が降ればトラバースを主とするアプローチの条件が悪くなる。天気予報の外れることを祈って一応明日を第四尾根のアタック日と決め、それがすんでから第二尾根だ。休暇の都合から関本 OB と体の不調の大井は明日下ることにする。

#### 偵察隊

AC (一一三〇) → AC (一五三〇)

#### 間ノ岳隊

AC (〇八二〇) → 稜線 (〇九五〇) → 間ノ岳 (一三〇〇~一三一五) → 北岳 (一五五〇) → AC (一六四〇)

29日

山田、大井は2時に起きて朝食の準備、4時には出発準備整ったが、その頃より雪が盛んに降り出す。残念乍ら出発は見合さないわけにはいかない。そうと決ると急に寒気が身に沁みて靴をぬいで寝袋にもぐり込む。5時頃からは季節風が烈しくなりテントの支柱を支える始末。夜明けと共に雪は止み快晴となる。しかし大樺沢から吹上げられる雪のため、テントはみるみる埋っていく。とにかく、こう風が激しくては岩も登れないと諦める。早く済ませた夕食後、『明日こそ!』と朝食のスープをつくりザイルを調べてシュラフに入る。

下山隊

AC ( ) →

30日

アタック＝西川、村瀬、サポート＝広橋、樋下、テントキーパー＝山田

5時30分、釣尾根を辿る四つの電灯。寒さは厳しいが幸いな事に風がない。細く鋭い月が東天にかかり背中あたりの興奮をしずめてくれる。やがて東の水平線は真紅にそまり、富士が黒々とシルエットを現はす。黄金でふちどられたバラ色のバットレス、サポートのラッセルの後をアタックが続く。

案じていた様に、第五尾根のまだルートをつけていなかった残り半分は雪が悪くて難澁し、dガリに着いた時は10時を廻っていた。こゝからサポートの二人はアンザイレンして引返す。アタックの二人もこゝでアンザイレン。30米二ピッチ下りぎみにdガリをトラバースして左岸にかゝると、こゝは南に面しているの、岩上の雪は極めて不安定。ベルグラに強引にアイゼンをきかせたかと思うとガリッとすべる。そのうえ第四尾根からの小落雪が絶えまない。仰ぐ第逆層の岩は、のしかからんばかりにマッチ箱付近で天に消えている。第四尾根のトラバースはアンダーホールドの二ピッチ半でcガリの滝上へ出た。冬ならばこそである。まだ天気は大丈夫。既に11時30分。次にcガリを50米登る。ラッセルに喘ぐ息を静めて、更に第四尾根へ突き上げている小ガリを一ピッチつめた。この上半では、雪が不安定に岩に乗っている状態でトップを大いに苦しめる。リッジへ出てマッチ箱の第二コルまでは問題なく、スタカットで順調に登れた。この上のオーバーハングにちょっと手こずり、打ち残してあるピトンにアブミをかけ、グッと上るが手一ぱいの所にある小さいホールドには氷がついて一度かけてもジワジワと手は滑ってゆき墜ちるのが落であった。その都度、懸命に確保するセカンドはいやと云うほど頭から雪をかぶせられた。dガリ側へは30糎位の



雪庇が出来ていて、リッジは左右華々しく切れ落ちている。一息入れて仰ぐ空にはいつの間にか暗雲が張りつめ、二人を一層不安にする。釣尾根からの仲間の声に励まされ再び体勢を整え、最後の手段と直登をやめcガリ側をからむことにする。捨縄をピトンに通して、これにぶら下がり一つの振子となって一枚岩を渡るが、雪のためホールドがわからない。アイゼンが「ガリッ」と音をたててすべる。その内に力尽きて戻ってくる。

しかし、遂にホールドを確保することができた。とにかく、この第二コルの通過に一時間もかかったため、第三コル上の雪壁を明るい中に抜けきることが不可能に思われてきた。第三コルには懸垂で下ることにして、雪を掘ってピトンを打つ。その中に陽もとっぷり暮れる。第三コルへは十八時。ビバークだと悲壮な決心をして、釣尾根の仲間に発行信号で知らせた。

サポート隊は15時にアタック隊を頂上に迎えるためにACを出たが、途中マッチバコに居る二人を認めて、これでは日のある内に頂上到達は望めないから多分ビバークだろうと判断した。しかし一応17時に頂上に上り15分ばかりアタックを激励してACに下った。この夜テントに当る風は特に激しく、夜半より雪さえ降る始末で、第四尾根の雪と岩の間で朝を待っている二人のことを思っでまんじりともしない。ビバークの二人はツェルトを打つ風雪におびえながら、明日の天気を願い、時計をにらむ。

#### アタック

AC (〇五三〇) →d ガリ (一〇四〇) →c ガリ (一一三〇) →第二コル (一六三〇)  
→三コル (一八〇〇)

#### サポート

AC (〇五三〇) →d ガリ (一〇四〇～一一〇〇) →AC (一三一五)

AC (一五〇〇) →北岳頂上 (一七〇〇) →AC (一八一〇)

#### 31日

雪もやんだらしい。じっと風の音を聞いているのはたまらなく寂しいので、5時になるや否や携帯に火をつけて、暖をとるついでに湯をつくる。つけたままだった電灯も線香の灯のようになった。一時間かかってテルモスに半分できた。風もおさまり静寂のうちにバットレスの夜が明けていく。ツェルト越に外の雪をさわってみると昨夜の新雪は10糎位で案外少ない。陽がさして来ないので恐る恐る顔を出して見ると、堂々と晴上っているではないか。はるか東の空が陽の光を庶えぎっていたのであった。ふり仰ぐと中央稜が圧倒的だ。7時に行動を再開。こゝから上は夏ならば50米ほどつ

るつるのキャンテとなり d ガリ側のクラックを登るのだが、今はべったりと雪のついた壁となっている。こゝの雪の状態が悪ければ極度に困難な所となろうと云う事は AC を出る時からの一致した意見であった。幸にも昨夜の降雪が少なかったため雪は安定していてピッケルが快適にきき、この壁は二ピッチで片づけた。さらにもう一段、トップが雪を払いながら岩を登ると、再び雪の斜面へ出る。そして傾斜は徐々に緩るくなり、頂上までキックステップの登高が続いた。

テントの三人も 9 時に食糧や飲物を持って揃って頂上に向う。途中、中央稜南面直下をトラバース気味に登っている二人を発見、ほっとする。

ヤッケも吹通す冷い西風の頂上で五人が互いに固い握手を交したのは正午であった。いつの間にかガスが周辺の峰々を包んでいた。

テントへ戻れば、登攀の話に暗くなったのも忘れる。風もなく、平和な一九五六年を送る。蛍の光の歌声。

アタック

第三コル (〇七〇〇) →頂上 (一二〇〇) →AC (一三〇〇)

サポート

AC (〇九〇〇) →頂上 (一一三〇~一二〇〇) →AC (一三〇〇)

1 日

元旦の朝も静かに明けた。

村瀬が凍傷にやられているし、他の疲労も回復していないため、昨夜の協議で今回の第二尾根登攀計画を放棄することに決めていたので、久し振りにゆっくり起きた。樋下がテントキーパーで村瀬が休養。広橋、西川、山田が間ノ岳へ向う。風も穏かで、のんびりと稜線を辿る。

AC (一〇三〇) →間ノ岳 (一三四五~一四一五) →AC (一六三〇)

2 日

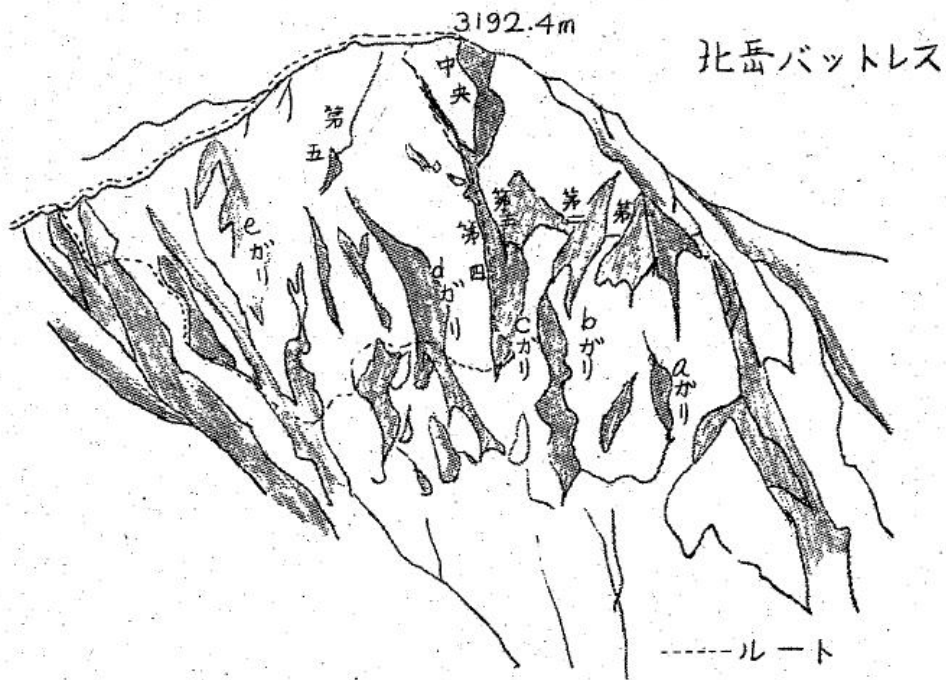
珍しく曇っている。予定通り撤収する。例の急坂の下りではさんざん苦しめられた。荒川小舎は超満員。往きにデポしておいた食糧や、こわれたテルモス、それに衣類の包み等全部無くなっていた。少々気分をこわす。

AC 地 (〇九三〇) →池山小舎 (一一三〇~一三三〇) →荒川小舎 (一五四五)

3 日

夜叉神トンネルからふり返えると、昨日までの山々は白銀に輝き、真青な空に真白な雪煙を吹き込んでいた。

荒川小舎 (〇九四五) → 鮎差 (一一三〇～一二〇〇) → トンネル入口 (一三五〇)  
→ 出口 (一四一〇～一四四五) → 芦安 (一五四五)



### [後記]

装備、食糧共今回は新しい試みはなかったが東京製綱より寄贈されたマニラザイル二本を使用した。ガソリンはラジウス四台に対して四リットル缶四つ、計十六リットル荷上したが、二リットルばかり残った。アタックの帯行した用具はザイル 30 米一本、カラビナ五、ロックハーケン十二、アイスハーケン五、アンマー二、捨縄三、ピッケル二、アイゼン二、わかん二及びツェルトで、ロックハーケン六、捨縄二を消費した。

今冬は天気恵まれすぎて何だか物足りない様な気がしたが、愉快に過ごすことができた。リーダーの未熟なため、アプローチのルートをつけるのに、多くの貴重な時間を費やしてしまい、とうとう第五尾根トラバースのルートの半分を未確認のままアタックに移ってしまった。このため、第四尾根でビバークを強いられるという結果になったのであるが、当時の心境としては、それ迄幾日か続いた好天に明日、明後日の好天まで期待して、更に一日偵察のために費す気にはなれなかった。

アプローチルートとして今回の第五、第四尾根をトラバースするルートは雪の状態でかなりの緊張の連続だったが時間的にも悪くないルートと考えられ、釣尾根の二九五〇のピークから c ガリの第四尾根取付まで二時間半もあれば行けるだろう。だから釣尾根に AC を置く場合は第一尾根、第二尾根や中央稜の攻撃にも有力なルートとな

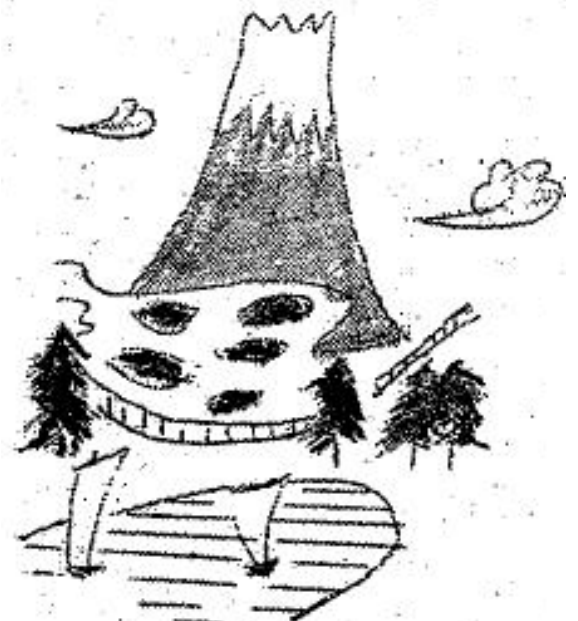
ろう。一般に積雪期のバットレス・アプローチ・ルートとしては大樺池又は釣尾根にベースを置いてバットレス沢→d ガリ→中央バンドのいわゆる夏のルート、掠奪帯から直接c ガリ又はd ガリの雪壁又は氷壁を登って中央バンドに登るルート等が説えられている。

何れにしても北岳バットレスの様に AC 迄も AC からもアプローチの長い所で苛酷な登攀を行うとするには、それに備えての体力の消耗を防ぐことが肝要であることを痛感した。

### 行動表

日	夜来神	荒川	池山	AC		
24		5				
25			5	3		
26		2		5		
27			2	3	2	偵察
28				3	3	偵察及び間、岳行
29			2			停滞
30	2			2	2	アタック及びサポート
31				3		
1				3		間、岳行
2			5			
3	5					

今冬は出発直前になって流行性感冒に罹って参加を辞退する者多く最終的には半数となった。このため装備、食糧の準備に相当混乱が予想されたが、責任者の懸命の努力によって支障一つなく、満足に山行を終らしめてくれた。又ボッカにおいても順調すぎる位順調に進み、これらの点においても、今回の山行は計画は大幅に縮小され、やはり数々の反省は尽きないが一応の目的を達したものであったと考える。最後に、終始有益なる御討論、御示唆、御援助を与えられた篠田教授、諸先輩方に厚く謝意を表す。



# 春山合宿

<1956年>

## 烏帽子小屋から黒部上廊下偵察（失敗）

一九五七・三・二四～四・四

### 参加者

J3	岡田博司	チーフ・リーダー、食糧	AC隊
M6	宍戸元	医薬、写真	AC隊
M2	乾正	装備	AC隊
T1	山本信樹	食糧	サポート
T1	兼清喜雄	食糧	サポート、時間記録
E1	野田憲一郎	食糧	サポート
P3	森川和子	装備	サポート
L3	一山幸代	装備	サポート

### 計画の決定するまでの経過

1. 三月に入って CL 西川は卒業実験が多忙で、本合宿に参加しない事が決った。来年度の CL は未だ決定されなかったが、それはさて置き、今回は岡田が代って L をやることにして、村瀬、四方等と力を合わせて合宿の計画、準備、実施を引き受けることになった。それ故、岡田は先ずメンバー十五名程度を考え、計画の概要を建てんとした。

だが、村瀬は見学旅行を抜けられないので、合宿参加を中止し、全計画から手を引く事になった。ともあれ、上級部員、岡田、宍戸、四方、樋下、二年部員山田、飯田、乾、渡辺等の参加を見込んで計画を進める事にした。

2. 阪大山岳部は今後、黒部源流の山々や黒部上廊下をやらなくてはならないと云う気持は可成り確定的なものであり、今春は先ず、黒部上廊下横断の為の偵察を主目標とする山行をやろうとそれが部の現状から考えて最も適当な事と考えられた。

ところで、右記のメンバーからすれば、いたずらに大人数でするよりも二パーティに分れて一つは彌陀ヶ原から五色を越えてスゴ小屋に入り越中側からの偵察、一つは烏帽子から赤牛に至り信州側から偵察と云うことが考えられた。(後から考えれば右記の部員が全部揃っていたとしても果して可能であったか疑わしい。)だが上級部員が揃

われないならば烏帽子から一本で行こう。そうなればテント二つを出して赤牛岳を越えて黒部上廊下の核心を目指して下降し得る可能性がある。又烏帽子岳から東沢にテントを出すのも良いであろうと考えられた。

この間参考にした文献は、三高報告、立教報告、黒部（冠）、DAC 報告等であった。

3. 三月も中旬となった。四方は風邪がこじれて合宿は不参加になるであろうと表明した。宍戸、山田、飯田、渡辺は在阪しない。ここに至って唯一の事は彼等の連絡を待つことであった。各係は在阪者をもって構成したが、メンバー確定しない以上準備は概括的な事以外手のつけようがなかった。

全員と連絡が取れたのは三月二十日頃であった。

樋下は風邪、山田も風邪、そして飯田、渡辺もそれぞれ合宿不参加を表明した。そしてここにメンバーが確定したが、雪山経験者は二名、新人四名と云うのがその内容であった。三月も下旬になった。私達には代る計画がなかった。ともあれ、小規模ながら従来の計画でなんとかやれるであろう。そしてそうする以外に仕方がないという気持であった。

#### 〔計 画〕

大町－葛温泉－濁小屋－（ブナダチ尾根）－烏帽子小屋

バスがどこまで入るか明らかではなかったが、実働四日あれば烏帽子小屋へ達し得る。新人及び女子部員は烏帽子小屋に二、三日滞在して下山させ、残る三名のみで東沢乗越にテントを進め、赤牛岳を往復する。六日あれば充分であろう。日が許せば東沢へも下ってみたい。だが、宍戸は六日にはどうしても帰阪しなければならない。

#### 〔食 糧〕

人数が不確定な以上、行動計画も不確定である。それ故、短時日に計画を建て、買付、梱包を為すにはどうしても経験者がこれに当らねばならないから、L 自らこの任を引受ける。

あらかじめの献立表をつくり人数の都合で適宜これを加減する。餅の使用は前以って依頼することも出来ないので取止め、濁までは米、稜線上ではパン一本で行く。昼食はクラッカー、荷物の様子を見て、昼食にみかんの缶詰を使用した。

#### 〔装 備〕

幕営具はナイロン二号テントのみで至極簡単であった。テントは可成り沢山損傷があり、森川嬢が修理に当たったが、もっと丁寧にやってもらいたかった。

個人装備—一般にアイゼンの手入が悪い。上級部員でもツアツケの丸くなったアイゼンを持ってくるようでは困る。

[方 式]

なんと言ってもメンバーの内容が十分な隊員配置を許さない。時間的制約があり、スムーズに荷上げを完了するためには、全員を長く稜線上におく余裕がない。それ故、今度の様な非常識とも云える方式を採ることになった。即ち、BHに隊員を残すことなくACを進めることは危険である。又、新人、女子部員のみで下山させる事も問題がある。

メンバーが良ければ、かような問題が起りはしないが、かかるメンバーであればそれに適した山行があり、方式があるのだ。私達はあまり黒部上廊下に固執し過ぎていると云う事が、客観的に見て云えるのではあるまいか。

[記 録]

岡田記

3月23日

18・45 大阪発（遅発）

多数の見送りをうけて全員八名、夜の大阪を発つ。

3月24日 小雪のち曇

8・05 大町発（バス）

9・05 葛温泉着 河鹿荘にて荷物を配分、全荷六十八貫

10・20 葛温泉発

11・32～12・25 昼食

15・20 濁小屋着

20・00 就寝

宍戸、大町で仕事があるために遅れて出発。荷を残して七名で行く。バスはやっと葛温泉まで入る様になったらしいが、雪は非常に多い。濁沢の小屋は一部屋だけが可成り良く、風もあまり入らない。

3月25日 薄曇一時小雪

5・30 起床

9・00 小屋発

10・00 ブナタチ尾根取付点

14・30 宍戸、岡田トラバースより上へ偵察に行く。他は小屋へ帰る。

15・20 小屋着（乾、山本、野田、兼清、森川、一山）

17・00 宍戸、岡田帰着

20・00 就寝

三角点へ共同装備、食糧を荷上げすべく出発する。こわれかけた橋で右岸にわたり二〇〇米程で取付点に達する。赤布が木についていて、ようやく判明したが、取付点のトラバースが非常に雪のつき方が悪い。空身でトラバースルートにラッセルをつけて見るが、可成り困難な様子なので他にルートを探す。しかし見つからず、結局夏道通りのトラバースをする以外に方法はない。

取付点に雪洞を掘り荷物を入れ、七名を帰らし、岡田、宍戸でナイロンザイルをフィックスし、上部をラッセルを兼ねて偵察し、悪場のないことを確めて帰る。

この様な状態が登り気味に40米ばかり続いている。

年によってはこの時期では木の棧道が露出し切っておりこともある。(例・京大 烏帽子→剣 (三~四))

3月26日 吹雪

全員停滞

河原の雪を巻きあげて風が吹く、薪作りをする。

三月二十七日 快晴

6・00 起床

8・00 出発

8・47 デポ着

9・35 デポ発

11・40 昼食

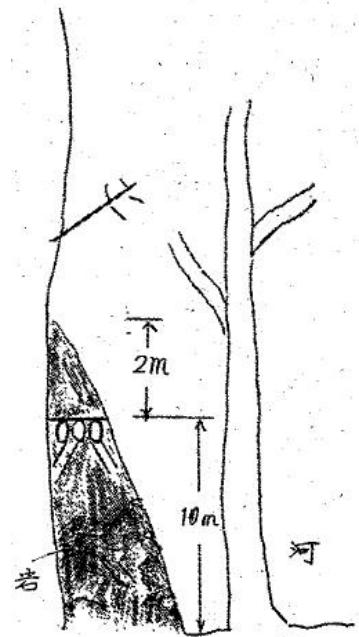
14・45 二二〇〇米三角点デポ

15・30 出発、下山

17・25 小屋着

21・00 就床

荷は軽く、雪はかなりしまっていてラッセルは比較的楽である。しかし三角点まで急傾斜の部分は幾つかあり、慎重にラッセルして行く。森林帯で雪崩の危険はまずないと見た。





三月二十八日 晴 上部でガスが出る

6・00 起床  
8・40 出発（第一隊）  
9・00 出発（第二隊）不必要品を東電小屋にあずけ後片付。  
11・40 昼食 前日より高所  
12・00 出発  
13・00 デポート 荷の一部を加える  
13・35 發  
15・55 烏帽子小屋着  
20・30 就床

Depot 地より上部にも急斜面や細くやせたナイフリッジ、不安定なトラバースがある  
（昨年、同大スリップ事故ありと聞く。）

烏帽子小屋は少し雪が入っていたが、先に入ったパーティがあると見え居住性良好、  
丹念に除雪し、ゴザ及びふとんを使用し快適なり。

三月二十九日 快晴 風なし

5・30	起床	9・50	出発
10・35	烏帽子岳	10・45	發
11・05	烏帽子小屋	11・20	下山出発
12・10	depot 昼食	13・00	下山隊出発
14・10	トラバース上部	14・40	トラバース下部
15・10~16・08	濁小屋		
18・30	葛温泉	20・20	タクシーで大町へ
21・00	大町着	22・17	大町發

---

13・30 荷上げ出発 15・40 烏帽子小屋着

サポート隊の山での生活はこれで終わりである。全員で烏帽子岳に登り、後下山せしめる。

岡田、宍戸、乾は荷を小屋に上げる。明日の天候は疑わしい。

三月三十日 曇、烈風

9・00 小屋發  
14・00 野口五郎岳頂上

16・00 テント設営終り、テント内に落着く。

一方下山隊は9・37 京都着

ちょっと出発を考えさせられる様な天気であったが、東沢のむこうに見える赤牛岳の姿に励まされて出発する。

歩き出しは可成り不安だった。おそらく行動出来るギリギリの天候であろう。岡田、乾、宍戸の順でちょっとした重荷にあえぎながら、雪と岩のコンビネーションを時にはもぐりつつ、時には風に吹き飛ばされそうになりながら三ツ岳を越えた。小さなピークを幾つか越して野口五郎岳頂上に達したが、あたり一面を急速に動くガスにまかれ今は黒岳も見えない。東沢乗越迄と思ったが、こう風が強くてはコルの状態如何でテント設営も困難であろうと考え、頂上附近に設営する事に決める。頂上より五十米手前の凹地にテントを張るが、あたりはシュカブラが発達し風の強く当ることを裏付けているが仕方ない。有名な東沢から吹き上げてくる風の強さは百も承知であった。

三月三十一日 風雪

昨夜から猛烈な風が吹いた。テントが今にも破れそうにはためいていた。最悪の事態を考えると不安であったが、陽気な話題で気分をまぎらわせた。テントが少しうまった。N2号テントは側面から雪に押しつけられると三人は少し窮屈すぎる。

四月一日 風雪

風も雪も間断なく止まない。ラジュウスをたくと、蒸気がテント内部につき、風であおられたちまちシュラーフの上に積る。オーバーシュラーフもシュラーフも凍ってバリバリである。非常に温度が低いらしい。日暮れの時刻になると、悲惨な気分が胸に滲み込んでくる様でたまらない。紛失したナイフで乾のエアーマットに穴があく。三名とも熱がある。そして身動きもせずテントに閉じ込められていると体の調子が不安である。それでも明日天気になれば、更にテントを進めるべきか、或は又、行けるところまで往復してくるか、等考えてみる。

四月二日 風雪

朝薄日が差している様に思ったが相変らずの天気である。もう一日の辛抱だろうと自らなぐさめてみる。外に出て見て少し動くも息切れがして苦しい。熱はあまり無いようだが少しうんざりして来た。明日が快晴なら別だが、もう烏帽子小屋に帰りたと思う。誰の気持ちも同じだろう。食糧もそんなゆとりがない。日にも制限がある。それよりも第一に、こんな惨めな気持ちをいつわりの虚飾で美化しようと云う気になれない。山に負け自分に敗けたのだ。再出発だ。

四月三日 ガス 烈風

11・00 出発

14・00 烏帽子小屋着

日はささない。だがガスの間から槍や遠くの山が見える。テント地よさらばだ。手袋をぬらして使い物にならないので靴下を手にはめる。しかし風が通って凍えそうだ。三ツ岳の登りで殆んどバテかけた。腹が減ってたまらぬので干ぶどうをほおぼる。三ツ岳からは元気を持ちなおして烈風にあおられながら小屋に辿りつく。テントで殆んど水を飲んでいない。コッヘルに半分ほど一気に水を飲む。

四月四日 快晴

11・00 小屋発 14・00 濁河原

14・40 濁小屋発

15・00 穴戸、乾、葛よりバスで大町へ→細野

15・30 岡田、葛温泉着、ここで泊る

赤牛岳が素晴らしく美しい。遙か遠くの黒岳からずっと手前にのびて来ている尾根を見て馬鹿にしていやがると思った。先日まで一生懸命反対の方向へ向って歩いていたのだから。東沢真直下り、赤牛からの尾根にとりつけばすぐそこだと云う気がする。(これは可成り確実な気持である。)

穴戸、乾は細野に寄りたいと言うので濁から少し歩いてから分れ、一人のんびりと風景を楽しみながら下る。

〔行動表〕

予定行動表 (仮案)

	濁小屋	三角兵	島崎行	栗双景越	赤牛
1	8 →				
2		8 ←			
3		8 →			
4			3 →		
5	←		5	3 →	
6					2 ←
7				← 3	
8	←		3		

行動表

1957	巻廻泉	濁小屋	取村実	三角兵	島崎行	野口五郎	栗双景越	赤牛
3.24	8 →							
25		8 ←						
26		停						
27		8 ←						
28		8 →						
29	←				3 →			
30					5			
31						3 →		
4.1						停		
2						停		
3						← 3		
4	←	←						1 2

凍りつく様な厳しい生活も  
 今は淡い夢の如く身内に潜み  
 燃えたつ歓喜と希望だけが  
 次に来る日々に輝きを与える

Spring has come.

高瀬の谷間にも遅い春が訪れて  
 醒みがそる木々とさえずる小鳥達にも  
 新しい太陽が眩しい程だ  
 いざ、目醒めよ。そして希望せよ！。

# 「マナスル通信」

## 山岳会の諸兄へ

徳永篤司

### ～サマ・ベースキャンプより～

夜半に、ふと目覚めてテントの外へ出て見ますと、東尾根の上に半弦の月が掛り月影に、凍りついたプラトーの稜線が、恐ろしい程の鋭さで星空を区切っています。時々凄じい音を立てて、マナスル氷河の一角が崩れ落ち来る外は何の音も無い凍りついた世界です。

都会に居る時は滅多に見ない星空ですが、こうしてネパール・ヒマラヤの一角に居ても、夜中にテントを出て空を仰いでいると、ふとこゝがマナスルの麓であるを忘れてしまいます。中学の頃から、ずっと長い間親しんできた日本の冬山でも、繰返してこうして夜空を仰いだその習慣が、この様な處へ来た現在でも、懐しい信州の何處かの峰々や、楽しい山行を共に重ねて来た山友達の事を身近に思い出させて呉れるのでしょう。

遙々とここまでやって来た訳ではありますが、初めてヒマラヤという處へ来て見て、色々小生も勉強になりました。氷河の水がこんなに濁っているという様な事も初めて知った次第ですが、ブリガンダキのルートがこの様に簡単に通れるという事も、日本で本を読んでいたのでは、想像もされない事でした。こうした経験を一々書き留めてゆくと、とても書き切れるものではありません。特に富士山頂よりも高いベース・キャンプ辺りより上になってからは、もうすっかり何も彼も初めての事ばかりで、完全に足が地を離れてしまった心地です。この様な経験—といっても未だほんの僅かではありますが—を総合して今日は書いて行き度いと思います。

第一に、ヒマラヤと雖も矢張り日本の山の連続又は延長であって、決して日本の山からヒマラヤへ行く事が不自然な飛躍や、不連続とはならないと思います。日本の山での経験が飽く迄もヒマラヤの基礎であることに変わりはありません。例えば、マナスルの登攀の成否を決するものは終始雪崩との斗いです。如何なる場合に、如何なる場所でそれが起るかという事が登るという事よりも遙かに困難な事柄です。命令（と言っても別に命ずると云う様な事はありませんが……）通り、運行表の通り、動き、泊り、そして登っていたのではこの際クライマーとしての価値はありません。誰も自分以上には自己の状態を知っている者はいないし、自らの山の経験の全てを挙げて、適宜に進退を決めて行くという事が行われねば、どうしても隊としてスムーズにテントを推し上げて行く事は出来ないでしょう。それが出来るか、出来ないかと云うことは

僅かにヒマラヤでの経験ではなくして、日本における一つ一つの山行に據る他はありません。

第二に、ではヒマラヤにおける経験と云うものは実際にヒマラヤでどの様に表れて来るだろうか、と云う点を第一の点と関連して採り挙げてみましょう。この隊には、ヒマラヤへ三度出掛けた者、そして小生の様に初めての者と三組が当然の事乍ら組み合わせられています。体の状態や態度等から結論的に云いますと、三度、二度組の間の差は余りないけれど、一度組との間には相当な差があると云う事です。勿論夫々の個人差が始めから有る事ですから、断定するには更にもっと日数を掛けなければなりません。個人差と言えば、こうした處へ来て始めて気付く事ですが、ヒマラヤが初めてであろうが、何度目であろうが、そんな事を超越して重要な事は、その人間の持っている人柄であると思います。所謂人間が出来ていると云う事が、脚の強さという様な事を小さく見せてしまうのがヒマラヤです。此處を登る為には、ヒマラヤに價する様な修養の出来た人格が必要です。残念乍ら小生はこの点まだまだ駄目の様です。

第三には、エクスペディションの内部で、クライミングの占める比重が想像以上に少いと云う事も実際に来て見て始めて判った事柄でした。隊の行進を阻む幾度の出来事の殆どが登山行為以外の出来事でした。ベースキャンプに着く迄に実に多くのクライミングがありました。隊の進行の上にも、私個人の出発に際しても……。

第四に、私達が注意しなければならないのは、都会における登山家の生活態度だと思えます。贅沢に馴れてはそれだけ、ヒマラヤから、山から、遠ざかってゆくという事に他ならないと思えます。

最後に、生命の危険について触れて置かねばなりません。早くも登頂を目指して、キャンプ・ワン・デポーへの荷上げ開始と共に、好むと好まざるとに拘らず、その幕が切って落された現在、この事を書き出そうとする小生の心境は甚だ複雑です。然し、何人もこれを避けて通る事は出来ません。この問題は、今、此處で考えて置かなかつたならば、死んでしまえば何も言えないだろうし、安全に事が済んでしまえば、後では必ずゆがめられたり、忘れてしまったりする可能性があるからです。私達は、山で恐ろしい目に逢い、もう二度とこんな事はよそう、と何度か思い、シーズンが来ると又出掛け、もう本当に足を洗おうと思い、そして……、やがてこんな繰り返しの後に、諦めて、止めようと思わなくなってしまうと云った経験を持っています。又、冬山の前に書き置きの様な物を残して出掛ける人も知っています。山、というより自然の恐ろしさを知れば知る程、これを一概に笑って済ませる訳には行きません。では、ヒマ

ラヤでは一体どの程度生命がおびやかされるでしょうか。恐らく、少く共、八千米峰では100%安全であると断言出来る人は一人もいないでしょう。何十年、或は年百年も掛らなければ、現代の科学の力を以ては、百パーセント安全に八千米峰の登頂を為し遂げる事は未だまだ無理だと云えます。登山が、スポーツでありながら、何か他のスポーツと異った様に考えられるのは、更にこの辺りに根ざしているかも知れません。来る時の船の中で、槇さんが言っておられましたが、鐘や太鼓ではやし立てれば、死をかけてヒマラヤへ出掛けようという人間は、いくらでも出て来るけれども、本物のクライマーというものは案外居ないのかも知れません。一度喰いついたならば、横から、誰が何を言おうが、どんな事が起ろうが、つかまえて離さないといった人間、登頂と言った華かな面よりも、エキスペディションに必要な地味な下働きを黙ってする人間が、これからの山岳部には育って来なければならぬと思います。

ヒマラヤエキスペディションは、一つ一つが大きなスケールを持っている様に、却って、その本質を見失いがちですが、しかし、あくまでも日本の山における、更に大学を出てからの山行の経験が大きくものを云う基礎になる事を覚えて居て頂きたいと思います。しかし、誰も彼もが、大学で山登りを熱心にやっていた人間の全てがヒマラヤへ行けるかという事は決してありません。(例えば、若しこの私達のマナスルが失敗すれば、当分は駄目になるでしょう。) 私達の周囲を眺めて見ても、明日にでもカルカッタ行の切符が買えそうな俣、遂に行かなかった人。スキーや他の事が面白くなって山を去った人。仕事に追われてすっかり忘れてしまった人など、いかに多くの人々がいる事でしょう。小生が、こうして今、マナスルの山裾に立っているのも単なるチャンスであれば、テンシンがエベレストに登頂したのもほんのチャンスであることを思えば、この事は直ちに納得のゆく事です。別にヒマラヤに行くことだけが私達の山登りの全てではない事は云うまでもありませんが、しかし、何時かはヒマラヤへも……と考えながら過す部の生活というものも亦、張り合いのあるものだと思います。

今度の遠征でも、小生は遠征組織というものを底から見ならう、直接山そのものよりも、隊長や隊員相互間の問題や、人間の個人感情といった事に注意を拂って来ました。酸素や食糧装備も勿論大切ですが、結局山へ登るのは人間だからです。私達の大学でヒマラヤへ遠征隊が出せる様になったらどんなに素晴らしいだろう、と思いながらこうした具体的な事に注意を拂うことは又、楽しいものです。

何れにしても、一つの釜の飯を食って育ってきた私達が、お互いのフレンドシップを決して登山のみに止めず、遊びにも、その他の事にもずっと維持してゆくことが、ヒマラヤなどといった事よりは遙かに現在の私達にとっては大切だという気がします。

昨日着いたポストラナーからの新聞で、立教の遭難が報ぜられ、小原監督が大いに気にしています。日本の山で、狭い黒部を渡ろうと渡るまいと、そういう事を決してつきつめて考えたりしないで、のびのびとした明るい山行をして頂きたいものです。私達も亦、安全な、愉快的な山行を、この美しいヒマラヤでやるつもりです。

手が冷たいので、大分読みにくいと思いますがおゆるしてください。

四月八日

<ベース・キャンプにて>





# 山行記録

1955年8月～

1957年3月

## 一九五五年

- 7月3日 仁川岩登り 10名
- 8月8日～8月9日 伊吹山 岡田
- 8月21日 比良打見山 岡田他
- 9月4日 仁川 岡田
- 10月10日～10月12日 上高地 岡田他
- 10月29日～11月4日 双六岳冬山荷上げ  
宍戸、岩永 OB、片山、村瀬、岡田、一山、森川、山田、飯田
- 29日 大阪発
- 30日 高山－神岡－栃尾 (14・00) －中尾 (16・00)
- 31日 中尾 (6・00) －双六小屋 (17・00)
- 1日 薪作り
- 2日 双六小屋 (10・00) －槍ヶ岳 (14・30) －槍沢小屋 (18・00)
- 3日 槍沢小屋 (7・00) －上高地 (16・00)
- 4日 松本 (0・43) －大阪
- 11月23日 道場 岡田他
- 12月3日～12月4日 高木、岡田
- 3日 四日市－御在所山の家
- 4日 山の家 (6・00) －御在所山 (9・00) －愛知川源流－杉峠 (12・00) －雨乞岳往復－藤切谷－山上 (16・30) －安土－大阪
- 12月30日～1月5日  
槍平より槍  
久保、由比浜、田島、山本 (全部 OB)
- 12月30日 大阪発
- 12月31日 曇  
岐阜 (5・21) －高山 (9・18～30) －船津 (11・30～12・00) －栃尾 (13・30～14・30)  
－槍見温泉 (17・00)

神原峠には可成りの積雪あり。バスは折柄の帰省客で満員。栃尾からは雪はうすら地表を覆う程度なるも、槍見の手前から約一尺程度となる。

1月1日 曇時々粉雪

槍見 (8・30) - 双股 (9・00~9・10) - 小鍋谷 (10・00~10・10) - 柳谷 (12・45~13・15) - 白出谷 (15・00) - 滝谷 (20・00)

朝忘れ物をして出発が遅れる。雪は双股を過ぎてからトレースがなくなり急に深くなる。小鍋谷につづく高巻道は草付の雪が不安定でスキーが雪ごと横すべり、後すべりして時間を食う。柳谷から後はラッセルと重荷に苦しむ。白出と滝谷の間で日が暮れ電灯をたよりに道を河原に求めていくも、滝谷出合で行詰り、ビヴァークに決す。一寸した岩蔭に三人もぐり込んで寝る。

(註) 山本単身大阪発、栃尾に泊る。

1月2日 (曇のち晴)

滝谷出合 (10・30) - 槍平 (13・30)

滝谷から上もトラバース道のラッセルがひどいが、しかし順調にはかどる。南沢を過ぎる頃より天候回復にむかい、北穂滝谷側の壁が見え出す。槍平は積雪約二米。小舎は二階を使用、非常に快適。山本夜に入って到着、全員揃う。

(註) (山本) 栃尾 (7・20) <sup>タクシー</sup> → 宝 → 双股 (9・00) → 滝谷 (17・00) → 槍平 (19・00)

1月3日 快晴

槍平 (6・00) - 飛騨乗越下のスキーデポ (11・00) → 肩 (11・30) → ピーク (12・30~13・00) → 肩 (14・00~14・45) - デポ (15・10~15・35) - 小舎 (16・45)

1月4日 高曇のち雨

小舎 (9・00) - 滝谷 (10・00) - 白出手前の着材場 (12~13・30) - 白出 (13・50) - 小鍋谷 (16・30) - 槍見 (18・30)

この谷道では下りでも余りスキーの威力は発揮できない。

1月5日 曇

槍見 - 栃尾 - 船津 - 高山 - 大阪

一九五六年

2月18日~2月29日 細野

○細野スキー場 2月18日~29日

木村、松木、岡田、部外者五名

18日 木村、松木他五名 17時05分大阪出発

19・20・21日 咲花、名木山で練習

22日 黒菱スキー場往復、岡田大阪発

23日 咲花スキー場、部外者五名帰阪

24日 咲花、名木山

25日 名木山、松木帰阪（14・00）

26日 八方尾根第三ケルン往復、快晴なれど第三ケルン附近では烈風吹き荒ぶ。

27日 名木山

28日 名木山、夕刻宿を発ち、大町にて春山合宿の打合せをする。

29日 木村、岡田大阪着

3月29日～4月6日 樋下他二名

名張ー山上ヶ岳ー洞川

4月22日 西川他一三名

蓬萊峽岩登り

4月27日～4月31日 山田、乾

八ヶ嶽

○メンバー 山田、乾

4月27日 出発

28日 晴

富士、南アルプス、奥秩父の峰々を背に八ヶ岳山麓を縫って走る小海線の松原駅で下車。本沢温泉に到着したのは午後五時頃だった。本沢温泉手前から残雪が現れた。

29日 雨のち晴

夜半過ぎからの激しい風雨も昼頃治まったので夏沢峠から天狗岳に向ったが稜線はまだ風が激しく根石岳で引き返した。

30日 快晴

陽が昇る頃本沢温泉を後にした。夏沢峠に荷物を下し根石岳天狗岳を往復。眼下にうねる一曲の流れ。見渡せば遠く近く北ア南アの連峯や木曾御岳の大きく裾をひいた姿が美しい。峠に戻り荷物を背に硫黄岳の急斜面を過ぎあえぎあえぎ登りつめた横岳の向うに息をのむ程富士が美しい。稜線にはほとんど雪はないが赤岳の斜面にはさすがに多い。横岳・赤岳、鞍部の石室に荷を置き赤岳頂上に着いたのは十二時半頃だった。下りは赤岳の斜面をトラバースして一文字に国界尾根に降りた。後は樹林の中をただがむしゃらに下るだけ。

4月29日 十三名

道場岩登り

4月30日～5月1日 西川

谷川岳

5月3日～5月6日 田島OB、樋下

劔岳

メンバー 田島OB、樋下

3日(晴) 富山(9・18～11・50) →立山駅(13・00～13・40) →美女平(14・15～15・00)  
→弘法小屋(18・40)

富山で甚だ便利悪く二時間半待たされる。ケーブルなし。途中で道連れになった富山大生二人と行く。尾藤東の下って来るのに逢う。弘法小舎は満員六畳に十二人ブチ込まれる。

4日(快晴) 弘法(6・20) →追分(7・00) →天狗(9・30) →室堂(11・00～11・30) →一ノ越(13・00～13・20) →雄山(14・00～14・30) →一ノ越(14・50～15・00) →雷鳥沢(16・00)

朝少し天気が怪しいが行く程に良くなる。調子は余り良くない。一ノ越直下でブルドーサーがガリガリと走っていたのには驚いた。天気が良いので稜線の眺めは又格別。一ノ越から雷鳥沢迄スキーは快い。雷鳥沢小舎も満員。

5日(晴のち曇) 雷鳥沢(6・10) →別山乗越(7・30～8・00) →平蔵コル(12・30) →頂上(11・30～12・00) →平蔵コル(12・30) →別山乗越(15・30～16・15) →雷鳥沢(16・30)

大阪好日山荘の連中に同行。雷鳥沢は担いで登る。平蔵の上の岩場は夏と同様、下りは前劔の下りの雪の状態悪く一寸厄介。雷鳥沢の下りは斜滑降横切りが威力を発揮。

5月6日(雨) 雷鳥沢(8・30) →天狗(9・00) →美女平(12・30)

雨でビショ濡れでゆううつ。ガスで見通しが利かずスキーもできぬ。

5月3日～5月6日 岡田、四方、村瀬

(新人) 兼清、渡辺、田中、山本、野田

新人歓迎比良山

5日 ひら駅(10・40) →大山口(12・00) →テント設営後全員カモシカ台まで散歩。雨近し。16・30 夕食後テントへ入る。夜間雨激しく夜中補強工事をする

5日 大山口 (9・15) →金糞峠 (10・20) →八雲ヶ原 (11・00) →武奈ヶ岳往復→  
八雲ヶ原 (12・30) →北比良峠→大山口 (13・30) →ひら駅 (15・00)

おくれて来た村瀬は昨日、間違えて八雲小屋に泊っていたそうで武奈ヶ岳頂上附近で逢う。連休で遠くへ出掛ける者多く、ゲルの乏しき者ばかりのささやかな歓迎キャンプであったが、実に楽しい山行だった。

5月5日－5月7日

山本 OB、大村 OB、坪井、辻川、飯田、松木 OG、森川

木曾駒ヶ岳

5月20日 西川、野田、兼清、山本

惣河谷岩登り

5月26日 岡田、野田

芦屋ロックガーデン

6月3日 西川、森川、山本

芦屋ロックガーデン岩登り

6月10日 西川他十三名

六甲大月谷

6月15日－6月17日 辻川、岡田、山本、野田

伯耆大山

16日 大山口→大山寺→元谷小屋→頂上→元谷小屋

17日 元谷小屋→大山寺→帰阪

元谷ヒュッテは十幾つかの寝台と丸木の威勢よく燃えるマントルピースのある可愛い小屋である。

6月17日 西川他五名

蓬莱峡岩登り

6月24日 西川他十四名

道場岩登り

7月12日 西川他八名

芦屋ロックガーデン岩登り

7月15日 西川他九名

蓬莱峡岩登り

8月16日－8月17日 岡田

## 大台ヶ原

16日（曇） 上市－筏場－近鉄山の家

17日（台風） 往路下山、猛烈な雨に本沢は形相を一変していた。

8月19日 西川、岡田、野田

## 道場岩登り

10月8日 乾

## 鈴鹿

四日市－湯の山－御在所三角点－武平峠－鎌ヶ岳－武平峠－野洲川ダム－土山－水口

10月10日 乾

## 比良山

ひら駅－大山口－北比良峠－八雲ヶ原－武奈岳頂上往復－八洲の滝－楊梅滝－北小松駅

10月10日－10月13日 山田、渡辺、山本信、兼清、野田

## 木曾駒ヶ岳

10日 大阪発 23時10分

11日（曇後雨） 上松駅 9時35分－敬神滝小屋－金懸小屋 15時10分

12日（薄曇） 金懸小屋発 8時20分－頂上 11時10分－宮田小屋－金懸小屋 15時

13日（曇） 金懸小屋発 7時45分－敬神滝小屋－寝覚床－（バス）－上松駅 11時40分－同駅発 12時45分

はじめ縦走の予定が、思わぬ悪天候のため、又中央アルプスは初めてのものばかりであったので、大事をとって木曾駒のみに目標を変える。

10月12日－10月14日 岡田L、森川、他一名

## 木曾御岳

12日 木曾福島駅のプラットホームでシュラフを抜けて初発のバスを待つ。登山口でバスを捨て、黒沢口から登る。まさに絢爛たる紅葉の季節である。四合半辺りの芒原を見事だった。六合目中小屋に泊る。

13日（雨） 可成りひどい降りだったが、森川は雨の中を歩いて見たいと、単身頂上に向い、二ノ池、三ノ池を廻って来た。

14日（ガス後晴）昨日の雨は乗鞍岳以北では雪となったらしい。森川を残して後片付を頼み、昨日同様のコースを辿る。午後荷物をまとめて下山。

10月21日－10月25日 坪井OB他数名

### 上高地

連日の雨のため小梨平にキャンプしたのみ。

10月22日－10月25日 田島、由比浜

### 木曾御岳

23日（快晴） 木曾福島（10・20）－黒沢（10・50）－五合目小屋（16・00）

24日（快晴） 五合目小屋（7・30）－剣ヶ峰頂上（13・52）－飛騨頂上（15・15）－  
濁川温泉（17・20）

25日（曇） 濁川温泉（7・35）－オカエ谷（8・20）－石楠花沢（9・00）－四合目  
（9・25）－一合目（12・30）－落合（13・30）－小坂駅（14・05）－帰阪

10月28日－11月3日

### 北岳

北岳バットレス第五、第四尾根のトラバースルート偵察、池山小舎への食糧荷上を目的として一週間秋色濃い南アルプスの山旅。

- ・期 間 10月29日～11月3日
- ・参加者 西川元夫、飯田稔、兼清喜雄、森川敬三
- ・天 候 雨。雨。曇一時雨、夕方より晴。快晴。晴、巻雲。高曇。
- ・行 動

29日 雨

身延線の車中から降り出して、今日一日降り続き夜半に至るも未だ強風さえ伴って降り続けている。芦安から峠への登りは旧道を使った。野呂川谷は紅葉のトンネル。

甲府（〇九〇〇）→<sup>バス</sup>芦安（一〇〇〇～一〇二〇）→トンネル出口（一四三〇）→鮎差（一六二三）→荒川小舎（二〇三〇）

30日 雨

午前十一時一旦出発しようとしたが雨愈々激しく停滞と決める。この小舎は鼠がひとなつっこくできている。

31日 曇

朝起きた時は星は空に、弦月が野呂川の上に不気味にかかっていたが、出発する頃から一つ三つ消える星がさびしい。池山のピーク当りから雨が降り出し、小舎を急い

で見つけほっとする。池はまわりに底知れぬ森をめぐらした幽絶境。午後は冬の準備に薪をどっさり作る。夕食後快晴。池は無数の星を浮べた。

荒川小舎 (〇五三〇) → 池山ピーク (一〇〇〇) → 池山小舎 (一〇一五)

1日 快晴

小舎に米 30kg、クラッカー8.5kg をデポしたので一行の足取りも急に軽くなった。その上快晴ときている。新雪を踏む触感も楽しい。北岳の小太郎側の雪はアイスクラストしていてビブラムが滑り少々困り、草すべりの下りにはうんざりした。

池山小舎 (〇六五〇) → 砂拂いの頭 (〇九四四~一〇二三) → 八本歯コル (一一四六) → 主稜線 (一三〇〇) → 頂上 (一三四〇~一四三〇) → 白根御池小舎 (一七〇〇)

2日 晴

大樺沢は昨夏のキャンプ地の巨石がなつかしい。流れは半分氷で飾られ、b、d ガリはきれいなアイスフォールをつくっている。西川、飯田がバットレスへ向い他の二人は先に広河原に下ることにする。旧雪がまだ大きく残っていることは珍しい。

バットレスは e ガリを上りカツオブシの下から第五尾根のトラバースにかかり d ガリに出た。d ガリから見た第四尾根は天に聳える逆層の壁である。このトラバースルートとして明かに三本確認出来、上の二本は此處に草をつけている。我々は中央のを採ったが一ヶ所いやなところがある。

白根小舎 (〇九〇〇) → 大樺沢 (〇九二〇) → バットレス沢出合 (〇九五〇) → e ガリ出合 (一〇一〇) → 第四尾根トラバース了 (一四三〇) → a ガリ → バットレス沢出合 (一六一五) → 白根小舎 (一七〇〇~一七二〇) → 広河原小舎 (一九五〇)

3日

河童に別れを告げて出発。夏にはガスで全々見えなかった広河原峠からの八ヶ岳に驚く。袋沢出合まで下って昼食とする。赤なぎ沢の滝は立派なもの。

広河原小舎 (〇八〇〇) → 広河原峠 (一〇三〇) → 袋沢出合 (一二〇〇~一二五〇) → 赤なぎ滝 (一四三〇) → 抑沢 (一七〇〇) <sup>バス</sup> → 甲府

10月30日-11月4日 森川、一山

穂高

31日 (雨) 上高地 (10・10) - 徳沢 - 横尾山荘 (14・30)

1日 (晴) 横尾 (7・40) - 湊沢小屋 (10・40) - 穂高小屋 (14・40) - 奥穂頂上 (14・50) - 湊沢小屋 (16・50)



2日(晴) 湊沢小屋(8・10)－北穂頂上(11・15)－湊沢小屋(14・10)－横尾山荘(16・50)

3日(曇) 横尾(7・20)－上高地(10・10)－焼岳頂上(13・10)－上高地(21・00)

10月30日－11月5日 岡田L、他二名

### 穂高岳

30日 大阪発

31日(雨後晴) 島々では秋空の下に紅葉が見事だったのに、上高地ではひどく降っている。しかし次第に雲が去り白沢出合では明神岳が全貌を見せた。徳沢で今日岩魚止から来る仲間を待ち横尾小屋に泊る。

11月1日(晴) 横尾(八・〇〇)－湊沢ヒュッテ(一〇・二〇～一一・三〇)－北穂北峯(一五・〇〇～一六・一〇)－湊沢コル(一七・〇〇)－湊沢ヒュッテ(一九・〇〇) 雪はザイテングラート迄しか下りて来ていなかった。例年より雪は遅いがそれでも新人がおり滝谷側のトラバースはガスに巻かれ可成り注意を要した。

2日(晴) ジャンダルムを往復する積りだったがアイゼンが足りないのでロバノ耳の手前から引返した。荷物をまとめて明神池迄下る。

3日(高曇) 豊岩にて岩登りを楽しむ。ここから明神岳を観察す。

4日(曇) 十時頃のバスで上高地を離れる。朝方の雨で明神最南峰は新雪をつけた。

5日 帰阪

11月2日～11月5日 町田他十名

3日(曇) 大山口－大山寺 散歩後休養

4日(快晴) 大山寺(8・15)－頂上(9・55)(10・20)－三鈷峰(11・30)(12・30)－大山寺

11月8日－11月10日 坪井、東(いずれもOB)

### 富士山

8日 快晴

大阪発(9・42)－吉田(20・00)－馬返(21・30)

9日 晴

馬返－五合(1・00)－八合(6・00)－頂上(7・40)－須走五合(9・00)－須走(14・30)－御殿場(15・54)

10日 大阪着 (5・10)

最短時間で富士に登るため吉田―頂上―須走夜間登山になった。雪は五合五勺附近よりつき本格的には七合以上であったが快晴無風のため富士のもつスケールの大きさを充分楽しむことが出来た。小舎は五合と五合五勺に人が入っていただけである。

11月12日 乾

吉野―山上ヶ岳―吉野

11月23日 岡田

道場

11月23日―11月24日 坪井 (OB)、他数名

比良山 (武奈ヶ岳)

11月25日 乾

鈴鹿

湯の山―藤内壁―御在所岳―国貝山―水晶岳―根の平峠―朝明ヒュッテ―菰野

12月1日―12月2日 山田、兼清

1日 湯の山山の家 20時着

2日 (晴) 山の家―武平峠―鎌ヶ岳―武平峠―御在所岳―湯の山

12月22日―12月31日 乾

志賀高原、戸隠、飯縄

23日 (晴) 長野―湯田中―丸池

24日 (曇時々雪) 丸池―熊の湯―笠岳―熊の湯

25日 (快晴) 熊の湯―横手山―熊の湯

26日 (曇時々雪) 丸池―長野駅―戸隠中社―和沢口

27日 (快晴) 和沢口―戸隠中社―越水高原―戸隠奥社―和沢口

戸隠表壁を正面に鹿島槍から槍穂高近くは飯縄黒姫を望み積雪約二米の白樺と落葉松の高原。ソバの旨い事天下一。

28日 (晴後小雪) 鬼女の紅葉で有名な荒倉山麓をスキで訪れる。

29日 (快晴) 和沢口―中社―飯縄山―中社―和沢口

30日 (晴) 和沢口―奥社―和沢口―長野駅

一九五七年

12月31日―1月1日

## 富士山

1月1日-1月3日

## 富士山

参加者 岡田、森川、一山、坪井 OB、由比浜 OB、三枝 OB

女子部員、先輩を主体とするパーティで吉田口からの登頂を目指した。

12月31日 大阪発

1月1日 (晴) 吉田発 (一四・〇〇) 馬返し (一四・三〇) 五合目小屋 (一七・〇〇)

1月2日 (高曇) 起床 (三・〇〇) 出発 (四・四〇) 経堂 (五・三五) 六合半 (六・二〇) 零下八度、風は頂上方面より僅かに吹き下ろすのみ。ライトをしまおう。七合半 (八・〇〇) アイゼンをつける。八合目 (九・三〇) 頂上付近から急速にガスが拡がる。風弱し。

久須志神社 (一一・一五~一一・四五) 弱いながらも風雪化。右回りに劔ヶ峰へ。劔ヶ峰測候所 (一二・三〇~一四・〇〇) 火口を一周して久須志神社 (一四・三五) 零下一二度。八合目 (一五・三〇) 頂上ガスで見えず。七合半で大沢に入る。五合小屋着 (一七・四五)

1月3日 (晴) 起床 (三・三〇) 出発 (四・三〇) 坪井、三枝、森川、一山出発す。富士吉田駅 (七・四五) 帰阪。岡田、由比浜は遅れて下山し伊吹山へ向う。

1月4日 (晴) 伊吹山一合目でスキーをする。夜、帰阪。

1月12日-1月13日 乾

## 伊吹山

1月20日 乾他三名

## 鈴鹿御在所岳

2月2日-2月6日 乾

## 吾妻山

2日 福島-米沢-福島-<sup>バス</sup>信夫高湯

阿武隈川よりみる安達太良、吾妻連峰は実に美しい。

3日 (曇後風雪) 高湯-家形ヒュッテ-高湯

悪天のためヒュッテより引返す。羽毛のような粉雪で怖い程のスピード。積雪 50、バス不通。

4日 (雪) スキー 積雪 180

高湯-福島-帰阪

2月26日－3月4日 辻川、岡田、東OB、他三名

細野スキー行

26日（曇） 辻川、岡田、名木山で練習

27日（雪） 名木山

28日（地吹雪強烈） 名木山

3月1日（曇後風雪） 東他三名到着し、午後全員黒菱小舎に登る。

2日（晴） 唐松岳往復後細野へ下る。

3日（晴） 岡田を残して五名帰阪。岡田は咲花、名木山でスキー。

4日（曇） 午前中名木山。午後細野発、帰阪。

3月3日－3月4日 乾

伊吹山

3月9日－3月15日 山本、兼清、野田

黒菱スキー行

9日（曇小雪） 細野丸山与兵衛氏宅へ着く。兼清、野田が先着していた。午後は咲花へ行った。ゲレンデには人が少なく練習は快適。

10日（曇雪） 野田帰阪。午前中は咲花へ行き、午後遅く黒菱へ出発した。名木山二時、黒菱四時。

11日（雪） 新雪が深く昼間もずっと雪が降り通しであったので少人数（二人）でのラッセルは苦しく、全く面白くない。

12日（風雪） 朝から雪が降りつづき午後になって風も加わったので練習中止。

13日（晴） 五日ぶりに晴れて小屋の外に出ると眼がまぶしい。快晴に恵まれたので第三ケルンへ登ることに決める。

出発九時－第一ケルン十時－第二ケルン十時五〇分－第三十一時十分－黒菱小屋十三時。

第二ケルンから上は風あたりが強くなって、第三ケルンの手前のこぶの辺りは石が露出していたのでスキーをかついで登る。周期的に風が強くなり身体ごと吹き飛ばされるような気がする。風上側には氷がはっている。第三ケルンに着くなりすぐ下った。

午後三時半、黒菱を出て四時半名木山ゲレンデに着いた。与兵衛氏宅で宍戸先輩に会う。

14日 兼清、山本は咲花へ。宍戸先輩は黒菱へ。午後の練習が済んだ後、兼清は帰った。

15日 名木山ゲレンデで練習をして最終で帰阪。

## 阪大山岳会時報＝編集後記＝

- ・いろいろの事情で時報の発行が遅れた為Ⅷ号は一九五五、五六両年度の合併号となりました。従って内容も全く記録中心となってしまいましたが悪しからず御了承下さい。
- ・本号は紙数の都合で集会記録は割愛しました。併せて御了承下さい。
- ・篠田先生にはご出発前の御忙しい中“これからのザイル”の一文を頂きました。ザイルについて色々論議されているときでもあり興味深い問題だと思います。
- ・徳永先輩のマナスル便りも発行が遅れた為時機を失した感があります。この点深くお詫び致します。
- ・会員名簿はⅦ号をもとにして作成致しましたが記載洩れ誤りがありましたら編集者までお知らせ下さい。尚、町村合併等で住所に変更がありましたらお知らせください。
- ・編集者の不慣れの為いろいろ欠点もある事と思いますが、お許し下さい。

編集責任者 乾 正